

清末小説から 138

2020.7.1

菊池幽芳『乳姉妹』の原作(誤解の系譜1)……………樽本照雄 1

陳景韓の漢訳プーシキン(上)……………荒井由美29

清末《旅客》雑誌小説目録……………王 玉、梁 艳35

清末小説から39

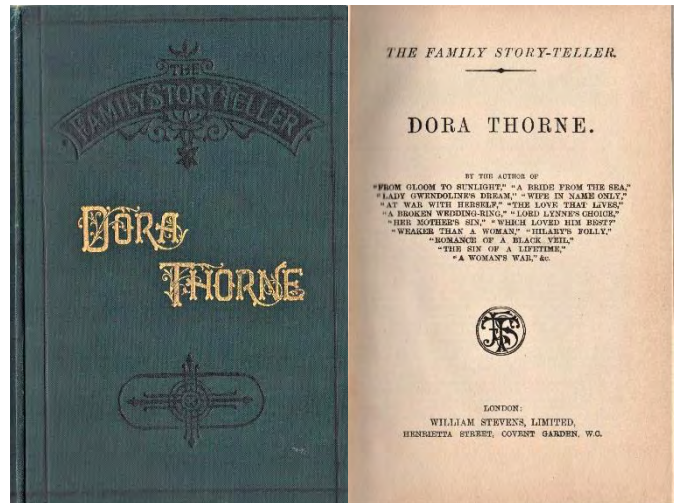
★本号は特別編集です。「いくたびかの阿英目録」は休載。次号掲載を予定しています。お囀

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

菊池幽芳『乳姉妹』の原作

(誤解の系譜1)

樽本照雄



無署名、LONDON: WILLIAM STEVENS, LIMITED. 刊年なし

はじめに——ブレイムとクレイ

菊池幽芳『乳姉妹』の原作はバーサ・M・クレイ (BERTHA M. CLAY) 『ドラ・ソーン DORA THORNE』であるという。現在まで続いている定説だ。

幽芳自身は明言していない。だが同時代人が『ドラ・ソーン』だということにした。著者の

幽芳は沈黙する。ゆえに黙認した形になった。

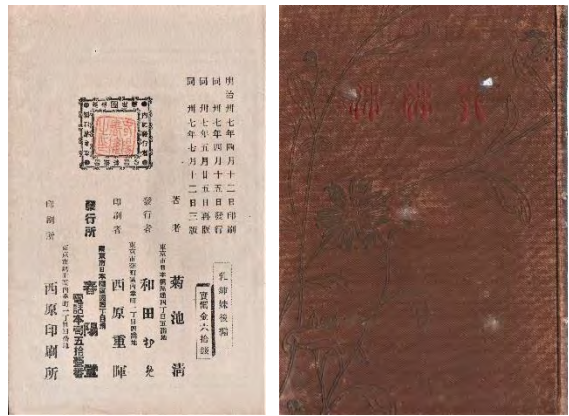
イギリス人シャーロット・メアリ・ブレイム (CHARLOTTE MARY BRAME、1836-1884) が大量の大衆小説を書いたことは有名だろう。それがバーサ・M・クレイ (BERTHA M. CLAY) を共同筆名として使用されることになる。ブレ

イムの作品ではないものもクレイ名義で出版されたということだ〔小森09-63〕ほか多くがそう説明する。参考までに述べる。本名の頭文字CMBを入れ替えBMCで筆名を作ったともいう。〔堀12-62〕〔堀17-30〕もそう書いている)。日本では圧倒的にクレイつまりクレイ名で知られる。本稿では引用以外はブレイム、クレイを使用する。

本稿は『乳姉妹』の原作が『ドラ・ソーン』ではないことを資料を出して証明する。

記述内容は以下のとおり。はじめに『乳姉妹』の原作が『ドラ・ソーン』だと認定された経緯を述べる。先に漢訳『一束縁』の原作が明らかになる。連鎖して日訳『乳姉妹』の原作についての再検討を行なう。英文原作との基礎的比較対照をする。その結論：『一束縁』の原作は『乳姉妹』と同一である。すなわち『ドラ・ソーン』は関係がなかった。従来定説がくつがえる。

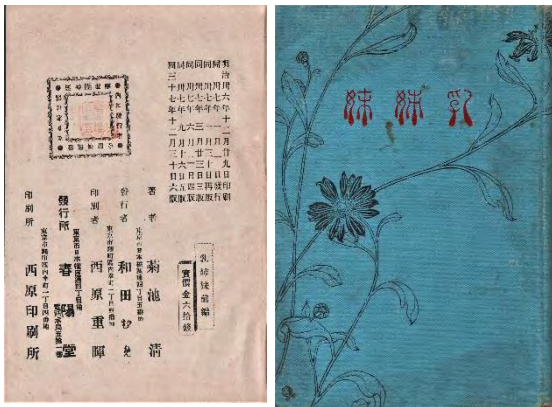
私が本稿で使用する『乳姉妹』の単行本は以下のとおり。



(菊池) 幽芳『(家庭小説) 乳姉妹』前後編

前編23 「はしがき」、活人画あり。本文は幽芳。奥付は菊池清、春陽堂 明治卅七(1904)年一月一日発行/十二月三十日六版

後編(本文は後篇)25 鏑木清方口絵、「乳姉妹前篇批評一般」あり。本文は幽芳。奥付は菊池清、春陽堂 明治卅七(1904)年四月十五日発行/七月十二日三版



初出は『大阪毎日新聞』(1903.8.24-12.26)に連載されたという(未見)。本稿では使用しない。

謙澄と幽芳の証言

幽芳の『乳姉妹』は先行する『谷間の姫百合』と同時に論じられる。あるいは引き合いに出し

て比較することが多い。両書とも同一作品を底本にしたと考えられているからだ。その作品も書いておく。

末松謙澄訳『谷間の姫百合』第1-4巻 金港堂 明治21 (1888) -23 (1890) 年 (第1巻のみ二宮熊二郎合訳の表示あり。国立国会図書館デジタルコレクション)

『谷間の姫百合』の原作が『ドラ・ソーン』であることは訳者自身が説明している。よく引用される文章だが説明の順序からいって必要だ。

「凡例」 (記号は筆者)

此書原名は ^{ドラ ソーン}Dora thorne と云ひ、始めロンドン刊行の小説新誌に続きものとして登録し、後ちロンドン及びニウヨルクの両所に於て一編の小説本として出版したるものにて、予嘗てロンドン滞在中これを読んで大に其巧妙に感じたり。今二宮君と謀て共にこれを訳す。



原作が『ドラ・ソーン』であることを明記している。ただし著者名までは書いていない。それを「再版例言」において補った (句点は筆者)。

此書原本英国版には著者の名なし。米国版にはベルサ、エム、クレイ (Bertha M. Clay) とあり婦人の筆に成るものと知る。初版此事を遺忘す。因て今之を記す。(出版者: 大瀧由次郎1920. 11. 15非売品による)

イギリス版は無署名、アメリカ版はバーサ・M・クレイになっていると説明する。この『谷間の姫百合』の存在が幽芳の『乳姉妹』原作探索に大きな影響を与えた。内容に類似している箇所があるためだ。

幽芳の証言を『乳姉妹』「はしがき」から引用する。赤色で印字された小活字だから経年劣化しておりとても読みにくい (一部のくり返し記号は文字に変換した。下線は筆者。以下同じ)。

一家団欒のむしろの中で読れて、誰にも解し易く、また顔を赧らめ合ふといふやうな事もなく、家庭の和楽に資し、趣味を助長し得るやうなものを作つて見たいものであると考へて居ましたので、さてさういふ事を考へながら、いろいろ読んで居ました外国の小説の中に、ベルサ、クレイといふ婦人の書きました短かなもので、一寸面白い筋のがありまして、講談に代用するやうなものを書くには、こんな趣向を、土台として、少し復々雑したものをつ拵へて見たなら、きつと成功するであらうといふ考の浮びましたのが、抑ら「乳姉妹」に筆を取らうとしました発端で、この小説はまたクレイ女史に負ふ所も多いのでございます。2-3頁

一家団欒のなかで読みたい小説だとする。幽芳のいう「家庭小説」の内容である。この記事で注目すべきは下線部のようにバーサ・M・クレイの名前を幽芳が出した箇所だ。しかしよく見てほしい。作品名までは明らかにしていない。これが誤解の生じる最大の原因である。

同時代人の認識——『ドラ・ソーン』という思い込み

『乳姉妹』前編が単行本になった。原作者の名前は記載されていない。新聞連載中からあるいは前編刊行後に広範囲から評判がいろいろとあがった。後編巻末にそれらを収録しているのが手がかりになる。

「乳姉妹前篇批評一般」と題し10頁にわたって小活字2段組で収録する。記事に署名があったりなかったり。掲載年月日は記載されない。以下のとおり。原作あるいは関連する事柄に言及する部分があればそれを引用する(傍点省略)。



時事新報[鬼頭13-59]1904. 1. 26/万朝報(田口掬汀)[鬼頭13-59]1904. 2. 2/東京毎日新聞/報知新聞/京都新聞/太陽(大町桂月)/文庫(高須梅溪)/東京日々新聞 新聞小説の改善(暮雪楼)「全篇の骨子はベルサ、クレイといふ婦人の作から取つて篇中の人物には作者が新たな活力を與へたものとの事……」4頁/

読売新聞 風頭語(劍南)「『乳姉妹』は、曾つて末松博士訳の名を以て、世に公にされたる『谷間の姫百合』の原作ベルサ、クレイ女史の『Dora Thorne』を基として、其趣向を取捨し、換骨奪胎を試みたるものなり……」5頁

「『谷間の姫百合』は……家庭小説として、今もなほ歓迎さるるに妨げざるものなり、幽芳子は、何故に、此原作を訳して示さざりしか、子の訳筆に長ずる所を以てせば、原作の妙趣を發揮すること、必ず『谷間の姫百合』の文章の杜撰なるに比して大に深切なるものありしなるべし」5頁

「吾人は、幽芳子の『乳姉妹』が、『谷間の姫百合』を翻するに其多く私意を加へて、却て成功を傷けたるを見て、今の青年作家に勸告せんと欲す、願はくは、其作を成すに独自一己を失はざれ、願くはその作の若し西欧文学に據れることを自覚せる時に於ては須らく其出處を明示して原作との関係を表すべし、然らざれば其経営の作も、成功と価値とを得るに所無からんとす」6頁[堀07A-61]明治37年1月24日(注:[木村58-249]によれば劍南は角田浩々歌客のこと。角田勤一郎。[瀬沼69-433]も同じ。ただし[関10-5]は正宗白鳥とする) / 神戸新聞 『乳姉妹』を評す(齋藤弔花) / 大阪新報 /

帝国文学 「予れ往年斯小説の粉本の訳『谷間の姫百合』を読み去れる時の感想を抱き来りて斯書に対す」10頁[堀07A-61]明治37年2月[鬼頭13-59]1904. 2 / 白百合 「こは十数年前末松謙澄氏の訳によりて、公にされたる『谷間の姫百合』と同一原作に筋を取りたるものなるが、『読売』の劍南子の云ふが如く、「幽芳子は[、]何故に[、]此原作を訳して示さざりしか、子の訳筆に長ずる[所]を以てせば、原作の妙趣を發揮すること[、]必ず『谷間の

『姫百合』の文章の杜撰なるに比して大に深切なるものありしなるべし」10頁[堀07A-61]明治36年10月(注:『読売』剣南を引用している。ゆえに明治37年1月24日より以後の文章だろう。「明治36年10月」では時間が不整合)[鬼頭13-59]1904.2

著者自身がパーサ・M・クレイ作品を底本に使用したと述べている。それに言及する評論文が出てくる理由だ。クレイであれば先行する『谷間の姫百合』を連想するのも当然だった。加えて内容に似た個所がある。そこから『乳姉妹』の原作も『ドラ・ソーン』だと短絡したらしい。『読売新聞』『白百合』に見るとおりだ。『読売新聞』が使用した「換骨奪胎」が『乳姉妹』を象徴する用語となった。

『乳姉妹』後編単行本の「批評一般」は各種の意見をまとめていて便利だ。偶然の一致だろうがそれらを引用したのが木村毅であり堀啓子である。鬼頭七美は典拠を明記する。堀と鬼頭は発表年月を明らかにする努力をしている点が木村とは異なる。

堀は末松謙澄『谷間の姫百合』がクレイ『ドラ・ソーン』を翻訳して激賞されたことに言及したあとで幽芳の翻訳に触れる。「同作のブームを一過性のものを超えた存在に換えた菊池幽芳」と『乳姉妹』の大好評につなげる[堀00-15]。

[堀00-15]そして幽芳自身は明言せずとも、その筋の類似から原作が *Dora Thorne* であったことは同時代から衆目の一致するところであった。

[堀07A-61]幽芳は「乳姉妹」の下敷きとした原書を、パーサ・クレイのものと言明している。しかしその作品の原題については、何も語っていない。ただ *Dora Thorne* を原作とする説は、同時代から衆目の一致するところであつたらしく、……(中略。『白

百合』と『帝国文学』を引用)……多くの言説の中で確信を以て語られていたのである。

なるほどと納得のいく堀の記述だと思う。幽芳の同時代から原作は『ドラ・ソーン』だという指摘がなされていた。誰もそれに異議をとらえなかった。ただ幽芳自身はパーサ・M・クレイ以上のことを説明する気はなかったようだ。幽芳がひとこと原作名を書けばすむことだった。それにもかかわらず彼は人々が勝手に判断したこと、すなわち間違いを閉却した(以下しばらく引用が続く。結論を知りたい人は「張治の新発見」へどうぞ)。ひとこと述べる。本稿で問題にするのは『乳姉妹』の原作だ。複数の論文を取り上げるが原作問題以外については視野に入れていない。誤解のないように願う。

木村毅の説明

幽芳自身が認知したようなかたちになった『乳姉妹』と『ドラ・ソーン』の関係だった。

木村毅が自分の体験にもとづいて記憶をたどりながら説明している。『乳姉妹』をめぐる記述はそれだけで信憑性が高いように感じられる(尾崎紅葉、黒岩涙香については省略)。

木村の小題は「『乳姉妹』のタネ本」という。あからさまな記述だ。

[木村58-247]尾崎紅葉のほかにも、パーサ・クレイに目をつけて、これを焼き直した小説で大あたりをとった作家がある。大阪毎日新聞の菊池幽芳で、あの新聞の紙数を飛躍的に増大させたといわれる有名な『乳姉妹』はクレイの原作、しかも『ドラ・ソーン』そのものなのだ。(注:「ソーン」と濁るのは木村独特の表記)

『乳姉妹』の原作は『ドラ・ソーン』だと断定している。詳しい説明はない。その必要があ

るとは感じていないからだろう。もうひとつ。幽芳が『谷間の姫百合』の存在に言及しない理由を木村は推測した。

[木村58-248]この講演でみると、幽芳は、彼の小説がでるより約十五年ほど前、この作は末松謙澄によって、名前だけは日本名にかえて(ドラが寅^{トラ}[虎]となるように)翻訳されていることを、知らなかったようだ。

幽芳は『谷間の姫百合』を知らずに同じ原作にもとづき『乳姉妹』を翻案したという。後に幽芳が『谷間の姫百合』に触れないことを問題にする研究者も出てくる(後述)。そこに幽芳の不自然さを感じるらしい。だが結論からいえば木村は幽芳に濡れ衣を着せている。原作が『ドラ・ソーン』だと思い込んでいるからこそ勝手に推測してその間違いに気づかなかった。学識豊富で研究実績を大いにあげている著名な木村が書いたことは大きな影響力をもった。

木村はその『ドラ・ソーン』原作説に自信を持っていた。後も自説に固執し変化がない。

「バーサ・クレイと明治文学」と題して文章を公表している。バーサ・M・クレイを論文題名にしているくらいだ。新しい証拠を出しているのではないか。期待は増す。説明が少し詳しくなっている。関連する部分を引用する。

[木村61-389]それから坂本(健一)氏は、菊池幽芳の『乳姉妹』という小説が評判になつて、よんでみると、全く『ドラ・ゾオン』の翻案であることを知つたとつけ加えた。

[木村61-396]これから十年たつて、読書界を風靡した菊池幽芳の『乳姉妹』は、たしかに『ドラ・ゾーン』の露骨な翻案にちがいないが、これは「門葉素訓」のへだたりから生ずる悲劇の前半は不要として削り去つて、後半だけを材料にもちいているので

ある。(注:「門葉」は家柄、血筋、「素訓」は育ち、教育を意味する。末松謙澄に使用例あり)

[木村61-400]昭和三十四年十一月十九日、神田古書店街にて(『ドラ・ソーン』を)偶然に発見。末松謙澄の『谷間の姫百合』の原本にして、菊池幽芳の『乳姉妹』もこの書の換骨奪胎なり。

木村も『読売新聞』が使った「換骨奪胎」という用語をくり返している。彼は尾崎紅葉の署名入りクレイ本を所有していたという。それだけで発言の信憑性が高いと感じる。多数のクレイ作品を実際に読んだことがあると述べている。そのような研究の大御所が断定するのだ。後続の研究者全員はそれを信じるほかない。

[木村80-343]大阪毎日新聞の小説家の菊池幽芳がまたクレイの愛読者で、ある婦人会の講演で、彼女の作を講談にかえ、もって新聞紙上から旧態を払拭したいと主張しているほど称揚し、ひところ洛陽の紙価を高うしたといわるる「乳姉妹」はやはり「ドラ・ゾオン」の後半の翻案なること、これは何人にも一目瞭然である。大阪の丸善支店で講求したというより外に、考えようがない。

木村は思い込んで凝固している。従来の見解を堅持して揺れない。『乳姉妹』の底本が『ドラ・ソーン』であると重ねて認定した。しかも前半を削除し後半だけを利用した翻案だと結論づけた。

しかし別の言い方をすれば木村が読んだ多数のクレイ本の中には『乳姉妹』の原作は含まれていなかった。ないからそれまでに流通していた通説である『ドラ・ソーン』が原作だと思い込んだ。違う作品を『乳姉妹』の原本に認定したから『ドラ・ソーン』と異なる部分は幽芳の

創作になる。そういう意味ではわかりやすい。

上記文章の前の翻訳年表([木村33])には『乳姉妹』を収録しない。少し奇妙だ。

著名なのは筑摩書房の『明治文学全集93 明治家庭小説集』だろう。

瀬沼茂樹の説明

瀬沼茂樹は該全集に収録した『乳姉妹』の研究と解題を書いている。

[瀬沼69-426、427]同じ作者(注:菊池幽芳)の『乳姉妹』は、序文によると、ヴァサ・エム・クレイ女史の小説『ドラ・ソオン』(末松謙澄訳『谷間の姫百合』)を換骨奪胎したもののだが、

この説明は正確ではない。幽芳が「はしがき」で述べたのはクレイという作家名だけだ。作品名は明らかにしていないことを忘れている。『ドラ・ソオン』原作という通説が頭から離れないようだ。

[瀬沼69-433]周知のように、「乳姉妹」は、ヴァサ・エム・クレイ女史の小説「ドラ・ソオン」(すでに末松謙澄訳「谷間の姫百合」明治二一がある)の翻案であるから、[瀬沼69-433]原作の「ドラ・ソオン」はとにかく、その翻訳である「谷間の姫百合」と「乳姉妹」との間には相当の異同がある。

『乳姉妹』の原作が『ドラ・ソオン』であることは動かしようのない事実にしてしまっている。『谷間の姫百合』と『乳姉妹』に異同があるのは当然だ。もとづいた原作が異なるからである。

木村、瀬沼という研究界の熟練専門家が『乳姉妹』の原作を『ドラ・ソオン』だと決めつけた。しかしよく見れば具体的な証拠を提示しているわけではない。幽芳は『ドラ・ソオン』を

原本に使用したという主観をふたりともに頭から押しつけているだけだ。私に言わせればこのあやふやな意見を日本の学界はよくもこれまで守り通したものだと思嘆しないわけではない。

その後は『谷間の姫百合』と『乳姉妹』を比較対照してその違いと同じ箇所を論じる論文が大半をしめることになる。原作の異なるものを同一視して論じるのはいかがなものか。今だからそう思う。しかし1世紀を超える現在まで異論が提出されていない。研究者のほとんど誰もが疑問を感じていないようだ。事大に首までつかっていればそれなりに安心だろう。日本の学術研究も中国学界と同じでそれほど先行研究重視ということなのか。

木村、瀬沼以後

木村、瀬沼以後の研究例を見る。原作について説明した箇所のみを抽出する。いうまでもないが網羅はしていない。私が知る範囲内であるとあらかじめ断っておく。参照すべき文献が不足していればご教示いただきたい。

本稿末尾に参考文献を掲げておいた。その略号を使用する。重複する箇所があるが了解をお願いする。

並べてみて気づいた。私の読んだ具体的な論文は主として21世紀になってからの発表だ。どれも幽芳『乳姉妹』が発表されてすでにほぼ100年が経過している。

[松井03]幽芳のこの作品は当時翻訳作品としても有名であったバーサ・クレイの *DORA THORNE* の翻案小説とされている。/*DORA THORNE* の後半の部分から『乳姉妹』は受容されたと考えられる。

上記引用は同一ページにあるのをひとつにまとめた。従来の定説どおりのことが書かれている。「されている」「考えられる」と伝聞の形で説明した。

[松井04-211]明治三十六年「乳姉妹」を「大阪毎日新聞」に掲載し、バーサ・クレイ女史の小説、『ドラ・ソオン』の翻案であったにも拘わらず大変な好評を博した。

こちらでは翻案だと断定した。それだけ。論文の主旨がアメリカ作家の作品『嵐と陽光』と『乳姉妹』の内容を対比するものだ。それ以上の説明がないのもしかたがない。

論文で言及が多いのは尾崎紅葉『金色夜叉』の原作をクレイ作品だと特定した前出の堀啓子である。ひとまとめにして紹介する。

[堀00-15]無名の外国人女流作家の作品を、僅か十五年の時を挟んで二人の鬚眉名文家が邦訳・翻案化し、共に江湖の好評を博した例は極めて珍しい。

[堀00-16]或は逆に、『谷間の姫百合』の原作を知り得たことこそが幽芳に *DORA THORNE* を選ばせる直接のきっかけになったのかもしれない。だからこそ彼が「はしがき」で「クレイ女史」にふれつつも、敢えてその原作名を明らかにせず、頑なに『谷間の姫百合』についての言及を避けたのは、その垂流と見られることを忌避したためかもしれない。

[堀07A-61]ならばなぜ幽芳は、「谷間の姫百合」と同じ原著を選んだのかが問題となる。

[堀07A-63]幽芳は「乳姉妹」の原作としてなぜ、この「谷間の姫百合」と同じ原著を扱ったのか。

[堀07A-63]敢えて同一の原作を擁したことにより、「乳姉妹」はけっして「谷間の姫百合」の焼き直しとしてではなく、新たな別個の作品として創り上げられたことを証明してみせた。

『谷間の姫百合』の原著が『ドラ・ソオン』

であることを何度も説明している。これを底本にして『乳姉妹』を書いたことをいう。幽芳がなぜ原作に言及しなかったのかと疑問をくりかえした(後述)。苦しい解説である。苦しいというのはそれが当たっていないからだ。

[堀07B-31]明治36年：「乳姉妹」『大阪毎日新聞』（菊池幽芳）*DORA THORNE*

[堀07B-36]菊池幽芳の「乳姉妹」は、「谷間の姫百合」と同じ原作 *DORA THORNE* を以て、十五年後に再び日本の読者に紹介されたものである。こちらは翻案³⁾であるだけに、ストーリーも原作とは抜本的に変えられており、一見して「谷間の姫百合」と同一の原作を擁することは読者に気付かせない。

3) 作品の序文で「ベルサ・クレイ女史の或作品から端緒を得た」（「乳姉妹」序）とされており、翻訳ではなかったことが、単行本で刊行当初から明らかにされている。43頁

堀の判断も木村、瀬沼と同じで一貫しており変化はない。『乳姉妹』の原作は『ドラ・ソオン』であるという。内容の異なる部分があるから翻訳ではなく翻案とする。幽芳が独自に改変したところを高く評価するのが堀の考えだ。だから『乳姉妹』が『ドラ・ソオン』を原作としていないことがわかれば堀説は自動的に崩壊する。

堀啓子の不思議な説明

その堀が刊行した著作『和装のヴィクトリア文学——尾崎紅葉の『不言不語』とその原作』（2012）を読んでいて奇妙な個所があることに気づいた。尾崎紅葉『不言不語』の原作がブレイム本であることを解明する専門書である。ブレイムの作品がアメリカで刊行されると名前を誤植されてしまった。それを説明する部分を

引用する。奇妙なものだ。

[堀12-62]加えて、彼女の作品がアメリカに容れられると、その名も独り歩きし始めた。たとえば、彼女の名前はアメリカでは、**Charlotte M. Braeme** としても知られている。苗字のスペルが間違っているのである。これは、一八七七年に彼女の作品 *Lord Lisle's Daughter* がアメリカで出版された際の、植字工のミスによるもので、**Brame** を誤って **Braeme** と組み込んでしまったがゆえのトラブルである。だが、その後も修正されないままに彼女の作品はこの名のもとでも売り出され、結果的にはアメリカでは、その正しくない綴りのスペルでも彼女の名は定着している。

該書においてブレイム原作というので謙澄『谷間の姫百合』についての説明はある(54-56頁)。しかし幽芳『乳姉妹』はでてこない。尾崎紅葉が該書の主題だからそれはかまわない。

上の引用に見るとおり堀の関心はブレイムの原文綴りが間違っているという個所に集中している。だから名前の誤植を印字した書物として *Lord Lisle's Daughter* (『ライル卿の娘』) という書物を示しているにすぎない。ここではいわば添え物である。誤植が重要であって作品の内容とは関係がないという考えなのだろう。読み流せば問題のある個所とは見えないかもしれない。

ここを読んで私は自分の眼を疑うほどに驚いた。よりもよって『ライル卿の娘』という書名が出てくるとはまったく予想していなかったからだ。

堀の解説はブレイムの名前について焦点を当てている。それで間違っていない。しかし幽芳『乳姉妹』の原作について何度も発言している堀がここを素通りしたのはきわめて不思議である。理解することがむづかしい。

見れば堀は『ライル卿の娘』についてその内容を紹介していない。私は困惑を覚える。同時にとても奇妙で奇怪すぎると感じる。

なぜなら『ライル卿の娘』こそが幽芳『乳姉妹』の原作だからである。堀はそれを言わない。これはなんだろう。

小説の中身を説明しなかったのは読まなかったからだろうか。書物の実物は手に取らなかったということか。先行文献の引用ですませたのか。アメリカの学会で発表したと該書にはある。その時の参加者から何か教示はなかったのか。いくつもの疑問が出てくる。

堀が『ライル卿の娘』を無視した事実についてにわかに信じることができない。あれほど幽芳『乳姉妹』の原作がブレイム本だといっている堀なのだ。にもかかわらず『ライル卿の娘』に気づかなかった。その事実が重くのしかかる。

やはり堀は中身を知らずに『ライル卿の娘』という作品名を出したらしい。内容を説明しないのだからそうとしか思えない。のちの研究者も該作品に言及することはない。誰かひとりでも該書を読んで触れたら問題になるだろう。それが無いのだ。

なぜそうなったのか考えてみる。堀も先行研究者と同じで『乳姉妹』の原作は『ドラ・ソーン』だと信じた。それを翻案したと思い込んでいる。これが最大の原因だと思う。堀にとって『乳姉妹』の原作問題はすでに解決している。そう認定して動かない。だから『ドラ・ソーン』ではない別の『ライル卿の娘』が出たところで気にしなかった。読もうとも思わなかった。

当たっているかどうかはわからないが結論としては一応それで納得する。だからこそこれほど不可思議な文章に出会う機会がそうめったにあるものではない。『乳姉妹』の原作を示しながらそれが原作であるという認識がないのである。訳がわからないというのが正直なところだ。

『ドラ・ソーン』原作説の流布

『乳姉妹』の原作は『ドラ・ソーン』だというのがすでに定説となっている。多くの研究者は追従しその定着した常識を披露して「換骨奪胎」とも表現する。便利な熟語だから中国の研究者姜小凌もそのまま使用している [小凌05]。堀論文と時間は前後するが関肇より紹介する。

[関08-84]よく知られているように、『乳姉妹』の着想は、十九世紀末に英米で活躍した女性作家バーサ・M・クレーの *Dora Thorne* から得られたものであり、末松謙澄・二宮熊二郎による翻訳として『谷間の姫百合』（全四巻、明治21.2~23.9、金港堂）であるが、『乳姉妹』が原作ともっとも大きく異なる点は、原作では双生児の姉妹とされているのを乳姉妹へと換骨奪胎し、乳母の子である君江が侯爵家の令嬢に成り上がろうとする物語に改変したことにある。

『乳姉妹』の原作ではない『ドラ・ソーン』と比較対照して「改変した」といわれても幽芳は困惑するだろう。

幽芳による「換骨奪胎」と「改変」の結果に生まれたのが『乳姉妹』だと関は考える。ゆえに君江の描写は幽芳の独自の筆になると理解する。

[関10-6]「乳姉妹」の二人のヒロインのうち、作者の幽芳自身は明らかに房江の形象を重視していた。その構想を逸脱しかねないまでに君江をはじめとする登場人物を生き活きと動かしていくことによって、かえって「乳姉妹」の文学的なテキストとしての強度が形作られていったのではないか。

事実ではない。「君江をはじめとする登場人物」はクレイ原作（ただし『ドラ・ソーン』ではない）の通りに動いている。幽芳のつけ入る

部分は多くない。馬車を人力車に、ピアノを琴に、ピストルを大ナイフなどに改変することはある。

アメリカで刊行された英文著作から少しだけ紹介する。

明治時代に発表された『不如帰』『金色夜叉』『虞美人草』および『乳姉妹』を「メロドラマ」という単語で象徴して論じる KEN K. ITO. *AN AGE OF MELODRAMA*. (2008) だ。

[KEN08-150]As far as I can ascertain, *Dora Thorne*, the work that became the basis for *Chikyōdai*, was one of the “original” Clay works written by Charlotte Brame. [私が確認できる限り『ドラ・ソーン』は『乳姉妹』の基礎となった作品である。シャーロット・[M・]ブレイムによって書かれた「オリジナル」のクレイ作品のひとつであった]

[KEN08-172]These observations are obviously problematic in analyzing *Dora Thorne* and *Chikyōdai* as melodramas.

[これらの観察は『ドラ・ソーン』と『乳姉妹』をメロドラマとして分析する際には明らかに問題がある]

『ドラ・ソーン』を基礎において『乳姉妹』を見ている限りその長く詳細な分析は無駄に終わる。

次の鬼頭七美論文は『乳姉妹』を主題にはしていない。だが関連するから少し引用する（注番号は省略）。

[鬼頭11-41]「家庭小説」の角書きを持つ菊池幽芳の『乳姉妹』（「大阪毎日新聞」に連載、一九〇三 [明治三六] 年八月二四日～一二月二六日）は、単行本化された際に幽芳自身が述べていたように、「ベルサ、クレーといふ婦人の書きました短かなもの

で、一寸面白い筋」のものを「土台として」書かれたものであり、参照された作品は「ヴァサ・エム・クレイ女史の小説「ドラ・ソオン」(すでに末松謙澄訳「谷間の姫百合」明治二一刊がある)」であるとされ、このため『乳姉妹』は「翻案」あるいは「換骨奪胎したもの」と言われている。[鬼頭11-42]つまり『乳姉妹』は『谷間の姫百合』の設定を部分的に借りて作られており、かなり自由な翻案と言えらる。

ここで説明されているのは従来からの通説であるにすぎない。鬼頭が同論文の「要旨」において「菊池幽芳の『乳姉妹』は単行本化の際に、著者自らが明かしているように、バーサ・M・クレイの『ドラ・ソーン』の翻案であるが……」[鬼頭11-41]と書いて瀬沼と同じ間違いを犯している。上述のとおり幽芳はクレイの名前は出した。しかしその作品名は明かさなかったのが事実である。『ドラ・ソーン』にもとづくとは周囲の人間がそう書いただけ。

その指摘も引用する。

[鬼頭11-51]なお、『乳姉妹』の原作が、『谷間の姫百合』の邦題で末松謙澄によってすでに翻訳されていたバーサ・M・クレイの『ドラ・ソーン』であろうということは単行本刊行直後の同時代評によって盛んに指摘されているが、『乳姉妹』の同時代評を紹介する紙幅がないため、ここでは割愛する。

これはすでに紹介した『乳姉妹』後編巻末の特集「乳姉妹前篇批評一般」を指しているのだろう。その後の論文[鬼頭13-59]において紹介している。ただし『ドラ・ソーン』部分は削除する。

まったく揺らぐことがないこの見方を多くの研究者が支持して受け継いだ。反対論は提出さ

れていない。

[横井13-355]また一九〇三(明治三六)年にはバーサ・クレイ Bertha M. Clay (一八三六～八四、英)の *Dora Thorne* (一八七一)に基づく「乳姉妹」を連載。こちらは「己が罪」を凌駕するほどの評判を呼び、何度も劇化上演された。

『乳姉妹』の『ドラ・ソーン』原作説は確実に深く広く定着していることがわかる。この流れを無視できる人はいなかった。関連論文を読んだ私の感想だ。

日本、台湾、中国の研究者たち

中国演劇との関係で研究の範囲は日本だけではすまない。漢訳との関係が論じられている。日本語論文はそのまま引用し陳宏淑たちの漢語論文には訳文をつける。

[宏淑12-5]在《乳姉妹》出版之前，日本已有一個旧訳本《谷間の姫百合》，訳者為末松謙澄。[『乳姉妹』が出版される前に日本ではすでに旧訳本の『谷間の姫百合』があり訳者は末松謙澄である]

[宏淑12-18]他的《乳姉妹》所展現的新女性特質也是有意顛覆十五年之前末松謙澄的訳作《谷間の姫百合》。[彼(幽芳)の『乳姉妹』で展開される新女性の特質は15年前の末松謙澄訳『谷間の姫百合』を意図的にひっくり返すものでもある]

陳宏淑の論文は[堀07A]を引用しているように堀論文に依拠している。『谷間の姫百合』と同一本にもとづいた『乳姉妹』という枠組みを離れない。同趣旨を反復しているだけだ。

潘少瑜はイギリス、日本から中国へと視野を広げる。バーサ・M・クレイ『ドラ・ソーン』を中核にしてそれが日本に伝わり末松謙澄と菊池幽芳の作品になった。幽芳『乳姉妹』が中国

に入って漢訳『一束縁』と『紅涙影』さらには漢訳『乳姉妹』になったという見取り図を提出した。

[少瑜12-14]這一系列的翻譯改作品，以伯莎・克雷的《朶拉・索恩》為源頭，以廉價小説的形式東伝到日本，先有末松謙澄（1855-1920）在1888年翻譯的《谷間の姫百合》，接著有1903年菊池幽芳翻案的《乳姉妹》。《乳姉妹》伝入中国之後，則産生了商務印書館出版的蘭言主人（本名与生卒年不詳）的中訳本《一束縁》（1905 [6]）、^{マア}29 陳梅卿訳写的《紅涙影》（1909），以及劉韻琴（1884-1945）将菊池幽芳《乳姉妹》中訳的《乳姉妹》（1916）。[この同系列の翻譯と書き換え作品はバーサ・M・クレイの『ドラ・ソーン』を源にして廉價版小説の形式で東は日本に伝えられた。まず末松謙澄が1888年に『谷間の姫百合』に翻譯し、つづく1903年に菊池幽芳翻案の『乳姉妹』である。『乳姉妹』は中国に伝わると商務印書館の蘭言主人（本名と生卒年不詳）の漢訳『一束縁』（1905 [6]）^{マア}29、陳梅卿訳『紅涙影』（1909）および劉韻琴（1884-1945）が菊池幽芳の『乳姉妹』を漢訳して『乳姉妹』（1916）になった]

29《一束縁》原作者標為「英国李来姆」，頭為 Brame 之音訳，但根據情節判斷，此書應該是菊池幽芳《乳姉妹》的中訳本。[『一束縁』の原作者は「英国李来姆」としており明らかに Brame の音訳である。筋立てから判断して該書は菊池幽芳『乳姉妹』の中訳本でなければならない]

潘少瑜の意見は『ドラ・ソーン』を『乳姉妹』の原作としているところが従来と変わらない。それを中国の『一束縁』『紅涙影』に拡張してつなげた。

注目すべきは漢訳『一束縁』の原作者を李来

姆（シャーロット・メアリ・ブレイム）とする個所だ。伯莎・克雷（バーサ・M・クレイ）ではない。潘少瑜はその違いを知っている。ここで『一束縁』について一言説明してもよかった。

潘少瑜の注29は樽本『清末民初小説目録』にそのまま収録した。次に紹介する飯塚容の説明も樽目録に収納して記述している。これが謎の解明に大きく貢献した（後述）。

飯塚の著作に黒岩涙香の翻譯に関連してバーサ・M・クレイに言及している箇所がある。論文入り口に引用されている『英米文学辞典 第三版』（研究社1952.2.28）を手元に置いて私が必要とする個所を点検しながら部分的に抽出する。[前記]は原文にあつて飯塚引用文にないことを示す。

[飯塚14-105] Braeme の作品は、明治年間にわが国へも紹介され、黒岩涙香が数冊訳出したほか、末松謙澄は[前記] *Dora Thorne* を「谷間の姫百合」の訳名で翻譯し（19 [8]88-90）、菊池幽芳は同じこの作品を翻案して「乳姉妹」（1903）を執筆した。[(西)242頁]

「1988-90」は飯塚の誤植。『英米文学辞典』の Braeme はそのように誤って綴る書籍が実際にある。正しくは Brame だ。辞典に記述されるくらい『乳姉妹』の『ドラ・ソーン』原作説は定着しているといえることができる。すでに立派な定説である。

飯塚は中国で上演された文明戯のなかに「姉妹花」があることをいう。その原作は幽芳の『乳姉妹』だと説明している。興味深い。

[飯塚14-147]このもう一つの『姉妹花』は、陸鏡若が日本から持ち帰った菊池幽芳の『乳姉妹』だと思われる。さらに遡れば、この作品は末松謙澄訳の『谷間の姫百合』、

そして原作のイギリス小説バーサ・エム・クレイ (Bertha M. Clay) の『ドラ・ソーン (Dora Thorne)』にまで行き着く。

飯塚が本文で言及するのは堀論文であったりする。先行き不安を覚える理由である。しかも『谷間の姫百合』を出すところも定石に従っている。図式化すればこうだ。バーサ・M・クレイ『ドラ・ソーン』→謙澄『谷間の姫百合』→幽芳『乳姉妹』→中国の文明戯「姉妹花」という伝播の流れになる。

[飯塚14-153]物語の中心人物である君江と房江は実の姉妹ではなく、題名通りの「乳姉妹」となっている。君江が素性を偽って侯爵家に入るという筋立ては『ドラ・ソーン』にはみられなかったもので、もしかすると幽芳は別の種本をもう一つ混在させているのかもしれない。

『ドラ・ソーン』にこだわり「別の種本」を混在させた可能性を取り出した。これは従来の説明とは異なる。珍しい。しかし混在させるのではなく「別の種本」そのものを翻訳したのではないかとは思わなかった。日本近代小説研究の思想的縛り(つまり常識、定説)が中国文学演劇研究者にも及んでいると実感する個所だ。

飯塚は幽芳『乳姉妹』が中国の文明戯「姉妹花」になったと考えている。たしかに文明戯には日本経由で生まれた作品がある。

その「姉妹花」が1914年4月に春柳劇場で上演されるにあたり『申報』に広告をだした。それに小説『一束縁』はイギリスの李来姆原作で日本人がこれを舞台化したとある[飯塚14-156]。ここで疑問を抱いてもよかったのではないか。しかし飯塚は気づかなかった。というよりも『ドラ・ソーン』から幽芳『乳姉妹』になりそれが文明戯「姉妹花」へと変化していった経過とは矛盾しないという判断だろう。

次にでてくるのが商務版「説部叢書」である。これに収録された『一束縁』が問題解決につながっていく。ただし解いたのは別人だ。

[飯塚14-157]最初の広告文にあった翻訳小説『一束縁』は、商務印書館一九〇六年二月に刊行された。筆者が入手できたのは一九一四年四月の再版本で、「説部叢書初集第二九編」「道德小説」と銘打たれている。序文には「英国人の著作『伯爵の娘』を訳述し、老鈍に脚色を依頼した。題名に精彩がないので、これを『一束縁』と改めた。これによって婦女の嫉妬心を戒め、家庭教育と婦徳が重視されることを願う」とある。末松謙澄の『谷間の姫百合』と同様の効果が期待されていたわけだ。形式は全二〇回の章回小説となっている。原作者の「李来姆」は「ブレム」の音訳に間違いない。ところが『一束縁』を読んでも、その内容は『ドラ・ソーン』や『谷間の姫百合』よりも『乳姉妹』に酷似している。

上は「説部叢書」本の「序」にある一部を日本語に翻訳している。引用された部分を原文のままに掲げる。



乃取英人所著之伯爵之女一書。口訳而囑老鈍演其義。病其名晦。易之曰一束縁。藉此警戒婦女貪憎嫉妬之心。則庶幾乎講求家庭教育。母儀婦徳。

序の署名は「甲辰十二月二十四日江東老鈍序与海上」とある。甲辰十二月二十四日は新暦1905年1月29日のこと。初版は1906年(後述)。文中の発言主は蘭言主人だ。潘少瑜が訳者を蘭言主人とするのはここを根拠とする。

『一束縁』初版は1906年刊行だから幽芳『乳姉妹』1904年よりも遅れる。この時間差が飯塚の誤解をまねくことにもなった。

原作は『伯爵之女』であると明記しているところが注目点だ。上述のとおり飯塚は加えて「原作者の「李来姆」は「ブレム」の音訳に間違いない」ともいう。『一束縁』奥付にある「原著者：英国李来姆」と序の記述を組み合わせると李来姆著『伯爵之女』が原作である。そこまで知って飯塚は次のように述べた。

[飯塚14-157、158]『一束縁』は『ドラ・ソーン』の翻訳ではなく、『乳姉妹』からの重訳なのか。それとも、ブレムに別の版本『伯爵の娘』があるのか。真相はよくわからない。

とても重要な手がかりがここに示されている。手がかりどころかこれが原作そのものなのだ。英文書名がないだけにすぎない。ところが飯塚は結論を求めなかった。

新しい潘少瑜論文に気を取られてその正解を見失ったのだろうか。正解を見ながらそれが正解だとは認識できなかった。次のように話が逸れる。それというよりも従来の定説にむけて無理やり方向を修正しようとした。

[飯塚14-158]潘少瑜は、『紅涙影』の後半

が『ドラ・ソーン』から離れ大幅に改変されていることを指摘している。また、『一束縁』については、「筋立てから判断して、これは菊池幽芳『乳姉妹』からの翻訳だろう」と述べている。

日本学界の定説に引っ張られるから身動きがとれなくなった。最後は未解決のままに放り出した。

[飯塚14-160]そうして文明戯研究からは離れるが、『一束縁』の中身が『ドラ・ソーン』よりも『乳姉妹』に近いのはどういう経緯によるものなのか。解明できない謎はまだ多い。

私から見れば飯塚は謎の正体をつかまえている。ほとんど解明しているといっている。あと一步踏み込み英文書名を明らかにしたならば問題は解決したのだ。正体を暴くまさにその場所に立っていたことがわかる。真相を覆っている布を引き剥がすだけの作業に過ぎなかった。飯塚にそれができなかったのは、くり返すほどに重要なのだが日本の学界に存在する定説(『ドラ・ソーン』原作説)に呪縛されているからだ。堀啓子のばあいと同じである。

それにしても最後に謎のままに放置したのは2008年、2009年およびこの2014年で3度目である。まったく同じ文章を重ねて使用している。これを見ると謎を解決する気はもともとからなかったのかと思わないこともない。

以上の飯塚と潘少瑜の意見を取り入れて樽本照雄編『清末民初小説目録 X2 [第8版]』(2016ウェブ公開)から『一束縁』には注釈をつけた。第7版(2015)から掲載している[編年③960]とあわせてここにまとめて示す(現在は第12版(2020)を公開中)。読みやすいように改行する。

[少瑜12]原作者名標為「英国李来姆」、顛為 BRAME 之音訳、但根據情節判断、此書尙該是菊池幽芳『乳姉妹』的訳本
 [飯塚14-157]李来姆はブレム、「ドラ・ソーン」や「谷間の姫百合」よりも「乳姉妹」に酷似している
 [編年③960]蘭言主人^マ与老鈍合訳、上海・^マ商務印書館、光緒三十二年(1906)二月出版、説部叢書初集^マ第二十九編と誤る、英人所著之「伯爵之女」

[編年③960]は陳大康『中国近代小説編年史』第3巻(2014)を示す。その「説部叢書」初集に「ママ」としたのは理由がある。初集は中華民国になって刊行されたからだ(後述)。陳大康の著作は清朝末期までと区切っている。それに後の民国の刊行物が出てくるのは編集原則から外れるという意味である。陳大康がその指摘を読んだかどうかは知らない。事実として陳大康は後に別の著作においてその初集箇所を削除した。(陳大康は『官場現形記』海賊版について日本金港堂に濡れ衣を着せたことがある。その証拠を提出する義務と責任が陳大康にはあると私は指摘した。のちに陳大康は別論文で何も説明せず関連部分を削除した。そういうことをする人らしい。無視するよりもマシということとはできる)

樽目録の注釈に「李来姆」「BRAME」「ブレム」「伯爵之女」を明記していることを見てほしい。これが張治にとっては探索する際の手がかりになった(後述)

あと少し中国人研究者の論文を紹介しておく。

[楊鄒18-428、429]今まで先行研究で判明された『ドラ・ソーン』の中国語訳は2つある。最初の翻訳は、1902年に出版された『一束縁』(商務印書館)である。表紙に「説部叢書 初集第29編 道德小説」と書いてあり、著作権ページに「丙午年二月初

版 原著者 英国李来姆 訳述者 商務印書館編訳所」と記されている。発音から考えれば、李来姆はブレムにあたり、バーサ・M・クレーの本名であるシャーロット・メアリー・ブレムのことだと推定できる。飯塚容の考察によって、「その内容は『ドラ・ソーン』や『谷間の姫百合』よりも『乳姉妹』に酷似している」ということが明らかにされている。

細かいことだが発行年の齟齬を指摘する。「1902年」に出版されたと書いている。しかし奥付には「丙午年二月初版」で丙午は1906年だ。しかも1906年刊行の「説部叢書」を初集とするのは間違い。この初集本の奥付には「丙午年二月初版/中華民国二年十二月再版」とある。つまり初集は1913年12月再版であってそこに示された丙午年ではない。

「説部叢書」の元版と初集について多くの研究者は区別する知識を持たない。このような誤解の積み重ねが後述する付建舟の著作によって打ち碎かれるのではないかと期待している。

[楊鄒18-439]1889年の『谷間の姫百合』の誕生をきっかけに、『ドラ・ソーン』は東アジアで長い旅を経て、換骨奪胎し、強い生命力を得たのである。原作の『ドラ・ソーン』を大幅に翻案した『乳姉妹』は家庭小説の典型をつくり、大きな反響を呼んだ。『乳姉妹』の成功に影響され、作品は様々な形で視聴者に親しまれた。新派劇や歌舞伎の舞台に上り、何度も映画化された。

論文名「中国における『ドラ・ソーン』の受容」が示すとおりだ。中心は『ドラ・ソーン』にある。『乳姉妹』が舞台化、映画化されたのは事実だろう。しかしそれと原作を『ドラ・ソーン』だと誤解していることとは関係がない。

楊文瑜+鄒波ともに従来の見識すなわち『乳

姉妹』の原作が『ドラ・ソーン』であることに少しの疑問も感じていない。

鄒波単独の論文名は「東アジアにおける『ドラ・ソーン』の翻訳と翻案」とある。こちらでも『ドラ・ソーン』を中心に置く。前出論文と同趣旨だといっていい。結論部分を引用する。

【鄒18-34】中国における小説の翻訳を考察すると、三つの訳本が『ドラ・ソーン』の日本語訳『乳姉妹』と関わっていることが明らかになった。『一束縁』は『乳姉妹』からの翻案作であり、韻琴女士の『乳姉妹』は菊池幽芳の作品を忠実に訳した作品である。さらに『ドラ・ソーン』をリライトした『紅涙影』は『乳姉妹』の内容を取り入れていた。『谷間の姫百合』や『乳姉妹』の存在は『ドラ・ソーン』が中国で受容されるに際して、重要な架け橋の役割を果たしていたのである。

鄒はここで日本での研究論文をまとめて記述した。『ドラ・ソーン』が日訳漢訳の源だととらえるところは従来と変わらない。『乳姉妹』を翻案したのが『一束縁』だ。『紅涙影』は『ドラ・ソーン』と『乳姉妹』の混合物だというぐあい。

ところが『乳姉妹』の原作は別にあるのが真相だ。立論の根底が崩れるのだからそれまでに公表した論文はすべて成立不可能になる。日本の研究論文を熱心に読んで日本語で書いた結果がそれだ。気の毒すぎて見ていられない。

以上のとおり『乳姉妹』の原作は『ドラ・ソーン』だと全員が説明する。例外がない。私が別作品を提示する2020年1月23日までの状況がそうだった。

張治の新発見

突然新しい発見が湧いて出てくるということはありません。あまり多くない。ある問題を思考し続けるこ

とが必要だ。それに資料的な手がかりが加わって偶然に突破口が見つかる。そういう順序を踏むのが普通だろう。今回のばあいは少し様子が違う。鍵語がそろっている。加えて謎解きの意欲を持つ人がいて電腦によるネット検索で問題が解決した。新しい形だということができる。

樽目録の注釈と商務版「説部叢書」の『一束縁』が準備された。その原作は何か。付建舟の著作(2019)が刊行されて新しい動きは生まれたといえる。

注意していただきたい。ものには順序がある。いきなり『乳姉妹』が出てきて問題が解決したというわけではない。あまりにも短期間のことだから理解がむつかしいかもしれない。

まず漢訳『一束縁』の原作が不明のままだったことがある。この問題が単独で存在していた。先行したのはこちらに関する新しい発見だ。その次の段階として日本の作品が浮き上がってくる。すなわち幽芳『乳姉妹』の原作問題が解決するはずだという見通しが別に開けた。結果として『乳姉妹』の原作が今まで言われていた『ドラ・ソーン』以外の作品で特定される。誰も疑問に思わなかった根底が顛覆した。そういう時間的順番である。最初から直接的に幽芳『乳姉妹』の原作が指摘されたのではない。これを確認しておく。

説明する。

2020年1月16日、中国人研究者張治による新しい指摘があった。新発見というのにふさわしい。

経緯を簡単に述べる。といっても長い期間の蓄積がある。できるだけ簡略化をこころがける。

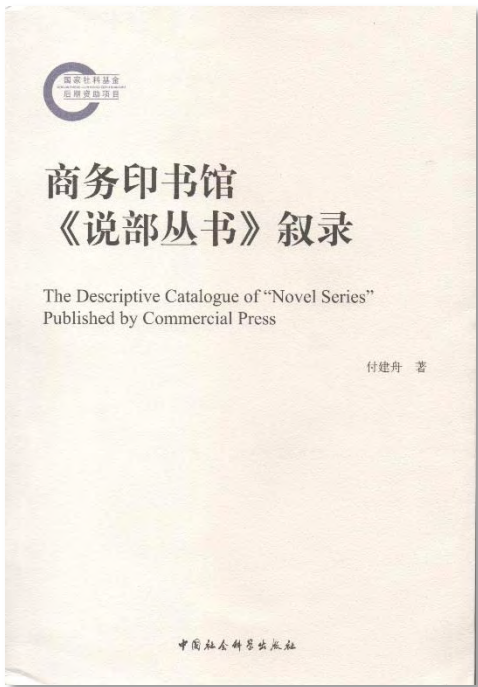
上海の商務印書館が外国小説翻訳シリーズ「説部叢書」を刊行していた。清朝末期から中華民国初期までの約20年間にわたり324種の外国翻訳小説を出版したのだった。その多種大量であるのが特徴だ。刊行の開始は商務印書館と日本金港堂が合弁会社であった時期に重なる(参照：樽本『初期商務印書館研究(増補版)』

2016ネット公表)。最初の収録作品が日本語作品から漢訳『経国美談』『佳人奇遇』になっていることから日中両社の緊密さが理解できる。

「説部叢書」は読者に歓迎されて重版をくりかえした。大量生産は大量消費につながる。その逆もある。当時は読み捨てられる種類の作品群だったらしい。たしかに薄い表紙を糊付けしただけで紙質のよくない刊行物だ。版型がほぼ同一の小冊子である。保存されることが少ない。版元の商務印書館すら正確な書誌を記録していない。中華人民共和国で一時期は外国排除の政治的動きがあったから「説部叢書」に注目する研究者もほとんどいなかった。日本の中村忠行は例外的な存在だったといえる。

そういう状況のなかで付建舟が「説部叢書」の全冊をそろえた。1924年に叢書刊行を完了した時から数えて95年ぶりだ。それまでまとまったものが出版されなかったというのも不思議なことだ。しかしそれが事実だった。

付建舟『商務印書館《説部叢書》叙録』（北京・中国社会科学出版社2019.8）である。



写真を多く収録して画期的な刊行物だ。あち

らこちらに散らばっていた書物をはじめて1カ所に集めた。それまで部分的に触れられるだけだったのだ。商務版「説部叢書」を中国で最初に総合したことは賞賛されるべき成果だと私は考える[樽本137]。しかも付建舟は原作について注釈をつける努力をした。最新の研究成果を引用して明記したのである。なかなかできる事ではない。

清末民初では海外小説の漢訳に原作者、原作品を明示していることは多くない。原作不明の作品がいまだに残っている。それを埋めていく作業は困難を極める。だからこそ現在にいたるまで原作を特定できないものがまだ多数あるというわけだ。

原作探索をする研究者は作業の苦しみを理解している。ほぼ漢訳本文だけで原作を探さねばならない。外国語が関係する。研究に着手する人が少ない理由である。手掛かりは極端に不足している。目録の不備は自分の力が不足するからだと普通は控えめになる。

ところが張治は違った。彼自身が林訳小説の原作をいくつも発掘している。努力家で篤実な研究者だ。ゆえに付建舟の著作に原作不明の漢訳があっても同情をもって評価を下してもよかった。しかし彼は書評を公表してその不足を厳しく批判したのである。やりすぎだろうと意外な印象をうけた。そこまでいうのだから張治自身が完璧な「説部叢書」目録を準備しているはずだと私は常識にしたがって推測したのだ。ところがそのつもりはないという「意表之外」の返答だった。肩すかしである。

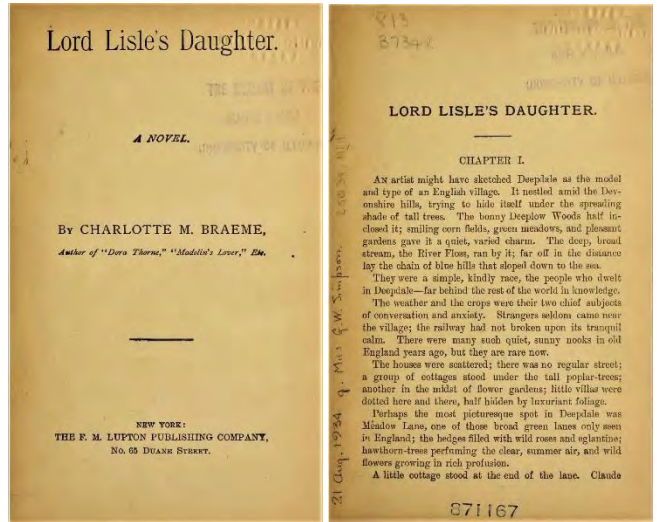
それはさておき張治の新発見はその書評の中で明らかにされた。本稿で何度も言及のある漢訳『一東縁』についてのものだ。商務版「説部叢書」に収録されているからこそ問題になった。パーサ・M・クレイ『ドラ・ソーン』ではない。あくまでも漢訳『一東縁』に関する。くり返すが幽芳『乳姉妹』そのものではないことを念押ししておく。

[張治20]初集第二十九編《一束縁》，署作者為英國的“李來姆”。日本學者飯塚容認為情節與明治時期小説家菊池幽芳的《乳姉妹》（1903年）很接近，台灣學者潘少瑜認為就是翻譯《乳姉妹》一書。我覺得不太可能是這樣。事實上，上述兩位學者也提出，“李來姆”這個名字，很容易想到這可能是清末民初小説家們很追崇的那位英倫維多利亞時代的女小説家 Charlotte Mary Brame（1836-1884），受這個想法影響，我決定逐一搜檢網上能找得到的該作家所有作品，終於發現《一束縁》的原作就是1880年紐約出版的那部 *Lord Lisle's Daughter*，也算是宅男不出門而得到的一點收穫了吧。

[説部叢書]初集第29編『一束縁』は作者がイギリスの「李來姆」だと書いてある。日本の學者飯塚容は話の筋が明治時代的小説家菊池幽芳の『乳姉妹』（1903）に近いという。台灣的學者潘少瑜は『乳姉妹』を翻譯したものだと考えている。私はたぶんそうではないだろうと思った。事実、上述のふたりの學者が「李來姆」という名前を出してこれ清末民初の小説家たちが尊敬してやまないイギリス・ヴィクトリア時代の女性小説家 Charlotte Mary Brame（1836-1884）だろうと簡単に思いついた。この考えにしたがってネット上で探せるだけの彼女の作品を検索してついに『一束縁』の原作が1880年ニューヨークで出版された *Lord Lisle's Daughter* であることを突き止めた。オタクが外出せずに得たちよとした収穫ということだ]

『一束縁』の原作はシャーロット・メアリ・ブレイム (CHARLOTTE MARY BRAME。筆名バーサ・M・クレイ) 『ライル卿の娘 *LORD LISLE'S DAUGHTER*』(1880)だ。張治はそう指摘した。前出の「BRAME」「伯爵之女」に該当する。

張治が掲げた書影を見れば説明はなくてもウェブサイト *open library* 収録本によっていることがわかる。その表示は CHARLOTTE M. BR Æ ME, “LORD LISLE'S DAUGHTER.” NEW YORK: THE F. M. LUPTON PUBLISHING COMPANY だ(刊年不記。ウェブサイトの説明は1880年)。BRAEME はよくある誤植で普通は BRAME と綴る。堀啓子の指摘がある[堀12-62]。



ウェブサイト *open library* による

張治が飯塚容と潘少瑜を出しているのは前述の樽目録を見ているからだ。それには「李來姆」「BRAME」「ブレム」「伯爵之女」などを明記している。張治が言うようにこの記述から探索の手がかりを得た。現代の研究者らしく直ちにウェブを検索して『一束縁』の原作を探し当てた。

資料的な条件と通信環境の充実、加えて忘れてならないのは本人の探究心の旺盛さだ。張治の新発見を私は大いに称賛する。

張治が『一束縁』の原作探索に成功したのには理由がある。樽目録にある「李來姆」「BRAME」「ブレム」「伯爵之女」という鍵語だけを手がかりにしたからだ。研究者が思い込んでいる『ドラ・ソーン』についてはもともと考慮していない。逆説的な言い方になる。余計な知識が

ないからこそ学界の定説に惑わされることもなく自由に探索することができた。ここは張治を讃えている。誤解のないように願いたい。

そして次の局面へ——幽芳『乳姉妹』に関連して

張治が原作を探し当てたのがあらたな出発点になる。張治が予想しない次の局面が展開する。幽芳『乳姉妹』についてのものがひとつだ。示された英文にもとづいて日訳を検討する必要がある。つぎに英文と漢訳を照らし合わせるのがやるべき作業だ。それを含めてこの後にさらに大きな問題がひかえている。本稿では『乳姉妹』に集中している。

『一束縁』の原作が判明したならばそれに連鎖して幽芳『乳姉妹』問題が解決するはずだ。『ライル卿の娘』こそが『乳姉妹』の謎を解く核心作品である。一瞬でわかった。

飯塚容、潘少瑜らは『乳姉妹』を起点として漢訳『一束縁』へ方向へ流れて継承されたと固く信じている。日本の学界ではその『乳姉妹』の原作は『ドラ・ソーン』だというのが定説だ。しかしそれとは別の『ライル卿の娘』が最有力候補として浮上してきた。

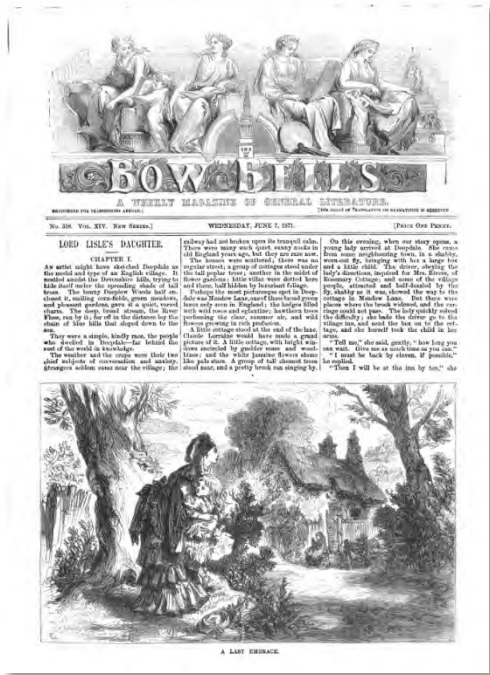
従来の伝播経路とは違う独立した動きが見える。『ライル卿の娘』原文と『乳姉妹』訳文を比較対照する必要がある。

『ライル卿の娘』と『乳姉妹』

『ライル卿の娘』の初出は週刊誌だ。無署名で挿絵がついている。

“Lord Lisle's Daughter” はイリギスの週刊誌 “Bow Bells” (1871.6.7-8.2) に掲載、のちに C. M. Braeme 著として “Dicks' English Novels” no.15 (London:John Dicks, n.d. [c1873]未見) に収録された[Law12-28]。

作品は読者の評判が高かったらしく転載重版をくり返している。別の叢書の中の1冊になった。本文3段組み、27頁の冊子形式である。C.



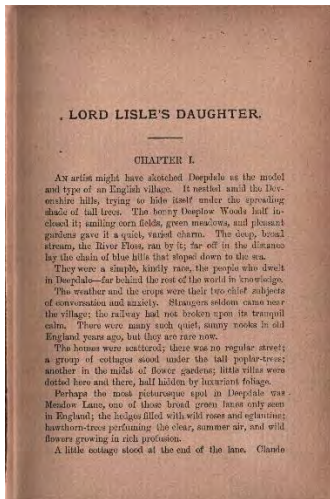
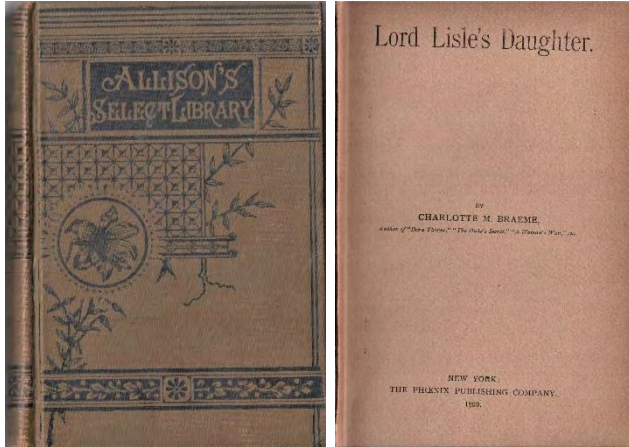
ウェブサイト hathi trust

M. BRAEME “LORD LISLE'S DAUGHTER” (FIRESIDE LIBRARY VOL.4 NO.45, 1878.11.21) である。これに掲載されているのは初出と同じ挿絵だ。

ウェブサイト nickels and dimes



架蔵のものは CHARLOTTE M. BRAEME
 “LORD LISLE'S DAUGHTER” (ALLISON'S
 SELECT LIBRARY . NEW YORK: THE
 PHENIX PUBLISHING COMPANY. 1892)
 だ。挿絵はない。



CHAPTER I.

AN artist might have sketched Deepdale as the model and type of an English village. It nestled amid the Devonshire hills, trying to hide itself under the spreading shade of tall trees. The bonny Deeplow Woods half inclosed it; smiling corn fields, green meadows, and pleasant gardens gave it a quiet, varied charm. The deep, broad stream, the River Floss, ran by it; far off in the distance lay the chain of blue hills that sloped down to the sea.

デヴォンシャー（イングランド西南部の州）のディーブデイルという田舎の村である。以上原作の風景描写は幽芳ははぶいた。彼によれば日本の読者には不必要な文章だったようだ。そのかわりに「播州飾磨の里に導く田舎道を」と場所を示すだけですませた。幽芳訳にほぼ該当する部分に下線をほどこす（以下同じ）。

They were a simple, kindly race, the people who dwelt in Deepdale—far behind the rest of the world in knowledge.

The weather and the crops were their two chief subjects of conversation and anxiety. Strangers seldom came near the village; the railway had not broken upon its tranquil calm. (まだそのころは播但鉄道も飾磨までは通はず) There were many such quiet, sunny nooks in old England year ago, but they are rare now.

天気と作物だけが村民の会話と不安の主な種だった。鉄道も通っていない。変化の乏しいに田舎に子連れの人婦がやってくる。それまでレイムの原作は風景描写が長く続く。原文にもとづく該当箇所を幽芳訳を挿入した。それ以外

前述 open library に収録される単行本（表紙は STRATFORD EDITION）の組版は1892年版と同一である。

以上を参照しながら『ライル卿の娘』が『乳姉妹』の原作であるかどうかを検証する。本文を比較対照するのが一番早い。

英文原作の冒頭部分を示す。気のついたことを記述し該当する箇所を『乳姉妹』を併記する（ルビは省略）。

は幽芳によって無視されて省略である。あるいは一部が書き換えられる。原作の鉄道部分は見るとおり上の箇所に出てくる。幽芳は説明の必要から後ろに移動させた。ブレイムの原作を把握しながら日本の風景に移植している。つまり部分的に手を入れながら作業を進めたから冒頭部分では描写が特に前後するわけだ。幽芳による省略が続く。

The houses were scattered; there was no regular street; a group of cottages stood under the tall poplar-trees; another in the midst of flower gardens; little villas were dotted here and there, half hidden by luxuriant foliage.

Perhaps the most picturesque spot in Deepdale was Meadow Lane, one of those broad green lanes only seen in England; the hedges filled with wild roses and eglantine; hawthorn-trees perfuming the clear, summer air, and wild flowers growing in rich profusion.

A little cottage stood at the end of the lane. Claude Lorraine would have made a grand picture of it. A little cottage, with bright windows encircled by guelder roses and woodbines; and the white jasmine flowers shone like pale stars. A group of tall chestnut-trees stood near, and a pretty brook ran singing by.

On this evening, when our story opens, a young lady arrived at Deepdale. She came from some neighboring town, in a shabby, worn-out fly. (或夏の午後五時過、播州飾磨の里に導く田舎道を、二人乗の俵に揺られて来る品のよい若い婦人がありました) bringing with her a large box and a little child. (膝の上には三ッばかりの女の児の／児を抱いた片側には、大きな柳行李を乗

せて居るのが) The driver, obeying the lady's directions, inquired for Mrs. Rivers, of Rosemary Cottage; and some of the village people, attracted and half dazzled by the fly, shabby as it was, (俵の上の美しい姿を見かけては、娘も女房も往来へかけ出して目をひき袖ひき、囁やき合ふといふ有様でした) showed the way to the cottage in Meadow Lane. But there were places where the brook widened, and the carriage could not pass. The lady quickly solved the difficulty; she bade the driver go to the village inn, (其中俵は里人に教へられ、杉の生垣を繞した、トある田舎家の前へ立留まると) and send the box on to the cottage, and she herself took the child in her arms.

英文の fly は軽装馬車だが幽芳はそれを「二人乗の俵」に置き換えた。婦人がつれている女兒について原文は a little child (小さな子供) というだけだ。しかし幽芳は上のおり年齢まで書き込む。「膝の上には三ッばかりの女の児の」とする。幽芳は原文の意味を大きく把握してそれにもとづいて微妙に書き換えていることがわかるだろう。直訳ではない。

“Tell me,” she said, gently, “how long you can wait. Give me as much time as you can.”

“I must be back by eleven if possible,” he replied.

“Then I will be at the inn by ten.” (貴婦人は車夫に一時間ばかり待居るやうにと吩つけて) she said, turning from him, and clasping the child in her arms. She walked quickly down the green lane; then she sat down upon the trunk of an old tree and gazed around her.

The child in the lady's arms stirred, and she bent over it, kissing the little face with a wistful love pitiful to see: (色白の愛くるしいのに、さっぱりした友禅の衣服を着せたのを抱て、時々はまだ可愛くてならぬといふ風に、わが児の顔に頬ずりをしては、しげしげと見入つてうつとりとなるのですが、その眼にはいつか涙の露も見えるのです) then she placed the child down for a few minutes, standing by her side.

kissing the little face (小さな顔に接吻をして)は「わが児の顔に頬ずりをしては」になる。原文とは違い俥の上のことに変更した。衣服について説明を加えるのは幽芳の工夫だ。また原文にはない箇所「母はまたわが児に美しい唇を押当てました」「薔薇の蒼のやうな唇に接吻して」を幽芳は加筆する。原作から細かく前後を動かすから幽芳の文章が全部に対応しているわけではない。

つぎから多くの箇所原文に一致する幽芳訳になる。木立に囲まれた乳母の小屋を眺める婦人と抱き着く娘の挿絵(最後の抱擁)部分だけを初出より切り取って引用する。



It was opened by a clean, kindly looking woman, who cried out with delight when she saw who stood there.
年のころ四十前後と見えて、ここらあたり

に珍しいほど品もあり、身姿も小ざっぱりとして、如何にも親切さうな眼色の女が、小走りに出て来ましたが、

幽芳は登場人物の年齢を書き込むことが当然だと考えていたようだ。原文にそれはない。

“I never believe it,” she said. “Can it really be you, Miss Margaret? I thought the news too good to be true.”

(女) おゝ、ほんとうにいらつしやつたのでございますかね、まアお嬢さま!

婦人の名前はマーガレット・アール (Margaret Arle または Howard) という。幽芳はここでは当然のように書き換えた。日本に舞台を移植したからだ。真野君江と名付けた。

“It is quite true, nurse. I could not leave my darling in any care but yours.”

(貴) 乳母、久しく遭はなかつたわねえ。この児を預けて行くのは、お前の外にはないのだから……。

以上の会話はほぼ原文どおりだ。乳母 (Susan Rivers/浜) の娘もマーガレット (幽芳訳では君子) という。婦人が子供を乳母に預けなくてはならない経緯を夫の名前などの詳細は説明できないといいながら語りはじめる。その部分のさわりを取り出してみよう。原文と幽芳訳を併記する。

You left my father's house when he failed; he did not live long after that.

先年この乳母が暇を取つた間もなく、この貴婦人の父の真野順蔵といふのが鉱山業に失敗し、数万の富を重ねた家も、バタバタと見る見る中に零落し始め、程なく父は死亡した所から、

幽芳は主人公の父親に真野順蔵という名前と職業として鉱山業をあてがった。読者は具体的な話だと受け取るだろう。原作では富裕な商人スティーブン・アール (Stephen Arle, a rich merchant/漢訳では史戴芬) だ。

My mother took me to London and put me to school there.

母に伴はれて東京に出、高等女学校の教育を受けてみる中、

ロンドンなら日訳では東京に置きかえるのは納得する。

She died when I reached my fifteenth year, and I was left quite alone.

十五歳の折に母親にも死別れて、全くの孤児となつて仕舞つたのです。

日本語は直訳になっている。

I wrote to you sometimes; but with that one exception there was no human being who took any interest in me. My father's friends, who courted me when he was rich, forgot my existence even.

乳母に手紙を書いて知らせた上記箇所は幽芳訳にはない。

Just before my mother's death she placed me as governess-pupil in a school near London. In return for the lessons I gave I was taught many accomplishments.

幸ひに情ある人の世話で、高等女学校だけは卒業する事が出来ましたが、卒業後は自活の道を立ねばならぬ必要から、小学校の教師となり、一年許を過す中、

ロンドン近くにある学校に住み込む教師兼学生というのが英文だ。幽芳訳の「一年許を過す中」は原文にない。

In my nineteenth year I left there to take my first situation as governess—it was considered a very good one. I had the charge of Colonel Seaton's two little children, who reside at Hurst Hall, in Norfolk.

丁度十九の時、華族出身の佐官の軍人の家に、家庭教師として雇はれることになつて居ましたさうで、君江といふのがこの貴婦人の名なのです。

家庭教師はよい。その家庭は原文では「ノーフォークのハースト・ホールに住むシートン大佐のふたりの小さな子供たち」だ。それを「華族出身の佐官の軍人」に変更した。その後の物語展開にそうする必要があったからだ。

結末部分が「君江といふのがこの貴婦人の名なのです」と著者の幽芳が語る形にした。前述のように原文のマーガレットには君江をあてた。もとは婦人が乳母に向かって自分で説明する設定である。登場人物の独白が続いていた。そこを突然に作者の説明で終わらせてまったく自由自在だ。

婦人の夫は名前を隠すのだが仮の話として言及する。原文と幽芳訳をならべる。

Captain Arthur—I may call him that—
仮に浅野海軍大尉と云つて置いてよ

アーサー (Captain Arthur Wyverne。のちの Lord Lisle) を音の近い浅野に置き換えた。それはいい。Captain は陸軍では大尉、海軍では大佐になるから齟齬をきたす。原作では陸軍である。

物語冒頭に女兒を連れて乳母を訪ねてきたの

は昔の雇い主の婦人（真野君江／Margaret Arle）だった。夫の看病のため外地（台湾／India）に赴くため女兒を預けた。婦人の船が難破して死去する。乳母の娘君江（婦人と同じ名前をつけられた。Margaret Rivers、通称Rita）と一緒に育てられた房江（本名は君子／Daisy Howard）だ。

房江の父（アーサー）はもどってきて房江を探すがみつからない。伯父の死により貴族を継承した。乳母は死ぬ前に房江にまつわる出生の秘密を娘の君江に告げる。君江は房江の出自を横取りして侯爵家に入りこむ。

中間を省略する。物語の最後あたりの部分を取り上げる。

侯爵の養子昭信（Philip Lisle）と結婚することになった君江だ。その君江の前に昔の恋人高浜勇（Ralph Ashton）がやってきて約束どおりに自分と結婚するように迫る。高浜が君江の嘘をあばく証拠として取り出したのは肖像写真だ。

He held toward her a portrait, the pictured face of a little child—a sweet, spiritual face, with tender eyes and sensitive lips; golden curls ran over the little head. p.156

この写真はいふまでもなく房江の幼顔の写真で、善く見ると、今の房江の顔の特質は、なほこの幼顔の中にも認める事が出来るのです。併し一寸見たばかりでは、すぐそれを房江の幼顔と気のつくほど似て居るものではありませんけれども、君江はそれを一目見ると、すぐに房江の写真だと感じたのであります。

（勇）誰の写真か分かりましたか。裏を見せてあげませう。170頁

原作の眼、唇、黄金に渦巻く髪の毛は省略してただ単に幼顔に書き換えた。ふたりの眼、髪

の色が違う原作のままでは日本に移植できないからだ。高浜勇の台詞は幽芳が作った。

写真の送り主の署名がある。

Underneath the portrait was written, in a clear, legible hand, somewhat faded:

“The portrait of my dear little Daisy, given to Susan Rivers by her sincere and grateful friend, Margaret.”p.156

写真の裏面には—

「君子（明治十...年...月...日生）／年月日 君子の母より／お浜どのへ」

と美しい女文字で認めてありました。171頁

「明治」をつけるのは原作を日本に移植したからだ。君子（Daisy）は房江の本名である。

『乳姉妹』後編には鏑木清方の色彩口絵がついている。再度掲げる。高浜が元の恋人君江に聖書を突きつけた場面だ。君江が高浜に贈呈したこの聖書のなかに身元を明かす証拠品が挟んであったという次第。ブレイム作品の初出に挿絵（驚愕）がついているのでこれも参考までに並置する。作品を読めば同じような図柄になるという例だ。鏑木が影響を受けたという意味ではない。



本稿の目的は幽芳『乳姉妹』の原作を特定することだ。以上のとおり証拠は十分にそろっている。『乳姉妹』の原作は『ライル卿の娘』である。『ドラ・ソーン』ではない。

ブレイムではなくクレイの理由

以上を読まれて自然に疑問を感じる読者も多だろう。『ライル卿の娘』の著者は本名シャーロット・M・ブレイムであるのに幽芳はなぜクレイと書くのか。ブレイムとクレイが同一人物だとしても表記が異なる。別版の表紙を引用する。



別版1893.5.6 ウェブサイト villanova digital library

ご覧のとおりこちらもブレイムを表示している。ただし筆名クレイとの相違を答えるのはそれほど困難ではないだろう。

該書についてはブレイムとは別にクレイ名義の刊行物がいくつか出ている。

たとえば SAMUEL HALKETT ほか編 “DICTIONARY OF ANONYMOUS AND PSEUDONYMOUS ENGLISH LITERATURE” 第2巻 (1971) がある。次のように表示する。

LORD Lisle's daughter. By Bertha M. Clay [Charlotte M. Braeme]. 8vo. /

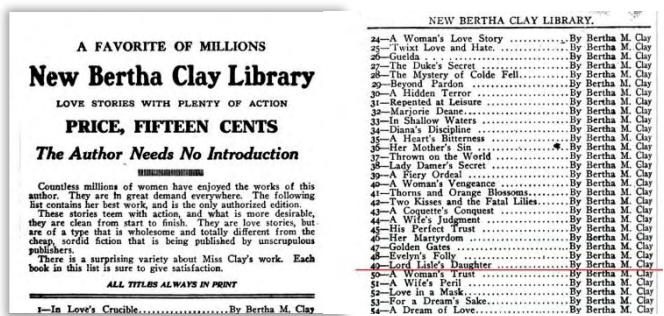
Chicago [1890] p.395

ほかにも New York: Street & Smith, [1900] などだ (所蔵は Syracuse University, Harvard College Library など。未見)。アメリカの図書館に所蔵されるから存在しているのは確実だ。もうひとつは書籍広告にある。

WENONA GILMAN “IF IT WERE TRUE”
NEW YORK: STREET & SMITH CORPORATION, 1894
GERLDINE FLEMING “ONLY A WORKING GIRL” NEW YORK: STREET & SMITH CORPORATION, 1895

以上2種類の小説はニューヨークの書店が刊行している。その巻末広告に “NEW BERTHA CLAY LIBRARY” が掲載される (ウェブサイト google books)。15セント均一価格で収録される叢書だ。すべて BERTHA M. CLAY (バーサ・M・クレイ) 名義であることがわかるだろう。あるいは同じく “THE BERTHA CLAY LIBRARY” に収録される。

つまり幽芳が底本として使用したのはクレイ名義の『ライル卿の娘』だったとわかる。



幽芳が原作名を出さなかった理由である。堀啓子は次のように推測した。同趣旨をくり返す部分を前記より7年後の別論文から引用する。

「幽芳が「はしがき」で「クレイ女史」にふれつつも、敢えてその原作名を明らかにせず、頑

なに「谷間の姫百合」についての言及を避けたのは、徒にその共通性や類似点にばかりに耳目を集め、或はその亜流と見られることを忌避したためかもしれない」[堀07A-65]

その間推測の内容は不変だ。事実を間違えているから説得力がない。あれこれ悩む個所ではないとわかる。簡単なことだ。幽芳が『谷間の姫百合』に言及しなかったのは『乳姉妹』に使用した原作とは関係がなかったからである。

思うに幽芳にしてみればクレイ原作の提示よりも『乳姉妹』が広く読まれることのほうが大事だっただろう。舞台上で上演することにも関係している。周囲が『ドラ・ソーン』だ『谷間の姫百合』だと勝手に議論しているだけ。幽芳が関知することでもない。そこにいまさら原作は『ライル卿の娘』でしたとは言っても感じなかった。それくらいのことではないか。

次をつけ加えて蛇足とする。

日本幽芳と中国林紘

バーサ・M・クレイ著、菊池幽芳訳『乳姉妹』の単行本前後編2冊が出たのは1904年のことだった。同じ1904年に中国では英国莎士比著、林紘＋魏易合訳『英国詩人吟辺燕語』が商務印書館から出版された。『一束縁』と同じく商務版「説部叢書」に収録されている。

日本幽芳と中国林紘が英文原作について取った姿勢が同じであることに興味を覚える。ふたりは原作について説明することはなかった。完全に沈黙したのだ。しかし両者を取りまいて発生した状況は日本と中国ではまったく異なった。

幽芳は原著者バーサ・M・クレイの名前は出している。しかし原作は明記しなかった。だから同時代人とのちの研究者は全員が『ドラ・ソーン』であると誤解し続けた。幽芳がひとこと記すだけで問題は解決したのだ。それをしなかった。しかし説明をしなかったというだけで幽芳が責められるわけではない。社会的地位が揺らぐこともなかった。あくまでも文芸界内部の

はなしだ。

同時代人あるいは後の研究者がもとから異なる原作の翻訳を勝手にならべて比較検討し作品論を展開しただけだった。内容が異なる(別作品だから当然だが)個所は幽芳の創作だ翻案だと随意に解釈した。堀啓子は別作品が原作であるとは知らず科学研究費補助金成果報告書に書いた。「幽芳が、作品を二分することによって、翻訳とは全く異なり、従来の翻案とも一線を画する、原作の一部を焦点化し、一作品へと膨らませていくという新たな手法を確立したという結論を導き出すことが出来た」[堀06]。その結論は方向違いで的外れている。このたび原作が明らかになった。関連論文のすべてを基本から訂正する必要があるだろう。

全員が誤ったままだから学術上の批判があがることもなかった。『ドラ・ソーン』と『乳姉妹』を熱心に結びつけて誤った議論をひたすら続けていた。そうして約100年をこえてようやく『乳姉妹』の原作が明らかになる。その意味では『乳姉妹』そのものに目には見えない爆薬(真相のこと)が仕込まれていたということだ。誰も気づかなかった。

一方で原作をめぐる同様のことが中国ではまったく違う様相を出現させた。厳しく激しい個人攻撃が実行継続された。著名な老人ひとりを大学の教授たちが集団で言論を用いて袋叩きにするという異常な現象だ。被害者は英国作品を共訳した林紘である。結果として中国近代文学史上まれに見る一大冤罪事件に発展した。

林紘の『英国詩人吟辺燕語』は莎士比(シェイクスピア)と明示している。しかし底本にしたのはラム姉弟『シェイクスピア物語』だ。林訳題名がそのまま『シェイクスピア戯劇物語』なのだから誤解のしようがないはずだった。莎士比著『莎士比戯劇物語』など成立するわけがないことくらい常識だろう。

日本明治時代に井上勤がラム本を翻訳した。そこには「英国シェイクスピア氏原著」(1883)

「英国西^{セキスビヤ}基^ス比^ビ亜^ヤ著」(1888)とある。ラムではない。これを見て「井上勤はラムとシェイクスピアの区別がついていない」などと日本では誰もいかなかった。当然のことながら非難する声が上がったこともない。

ところが中国では異なる。常識を無視した。林紓が莎氏しか明記しなかった個所を刊行14年後になって文学革命派はつかまえた。莎劇を勝手に小説化したと林紓を攻撃したのは大学教授の銭玄同と劉半農だ(なれあいの芝居)。つづいて「戯曲を小説にかえて翻訳した」「戯曲と小説の区別がつかない」と林紓を強烈に批判した。論難し攻撃する銭玄同劉半農たちは原作がラム本であることを十分に認識していた。ラム本を漢訳して小説になるのは当たり前だろう。しかし文学と翻訳および絵画でも著名な老大家というだけの林紓を引きずり出し自分たちの敵に仕立てて痛罵し糾弾することが主要目的だった。だから自分たちに都合の悪い根拠については知らぬ顔をした。意図的に政治運動へと転換したのだ。中国の知識人は誰も林紓を擁護しなかった。林紓の死後に鄭振鐸が別の林訳作品についてあらためて莎氏の「戯曲を小説にかえて翻訳した」と審判判定のうえ確定した(これも嘘)。当事者と後世の研究者全員が林紓に濡れ衣を着せたのだった。こちらも林訳批判そのものにまさか爆薬(真相のこと)が含まれていたとは気づかない。

林紓は批判を受けたが反論せずほとんどすべてを無視した。ラム本だとひとこと言えば劉半農らが根拠とした「戯曲を小説にかえて翻訳した」が崩壊する。だが林紓は幽芳と同じく無言を貫いた。事実を書くだけむだだと理解していたようだ。

これが中国において実際にあった林紓冤罪事件だ。100年近くが経過して真相が明らかにされた。林紓の冤罪が確定したのである。そのことは同時に多数の研究者が公開した林訳関係論文のなかにある見えない爆薬が炸裂したことを

意味する。林紓を罵る快樂のために文字どおり世界中から嬉々として集まった多数の才能ある研究者たちだった。林紓が冤罪であると判明したその瞬間に彼らは吹き飛ばされた。

奇奇怪怪なのはその後登場した日本の中国現代文学演劇研究者瀬戸博士である。林紓の冤罪が証明されたにもかかわらず冤罪の事実を認めようとはしない。文学革命派は正しいと強く支持し林紓批判を継続した。そればかりか林紓自身にあたかも責任があるかのように一層不当に扱った。論点をすり替え、被害者になりすまし、二重基準を適用するという荒唐技術を当然のように使用して林紓を狂暴に非難した[瀬戸16][瀬戸陳17]。結局のところ瀬戸博士は「林紓を詐欺師に認定し林紓の人権を侵害し名誉を毀損する」のである。事実にもとづかない研究に価値があるはずもない。完全な確信をもって中国学界に事大する。そのためなら自爆も辞さないのだと理解した。

幽芳と林紓ふたりの姿勢態度は同じである。途中経過は違うが最初と結果はよく似ている。真相が明らかになった(爆発した)という部分は日本と中国で共通するのだ。日中でそれぞれ関与した多くの優秀な研究者はそれまで体験したことがない状況に直面する。知らぬ間に目を覆う大惨状のただ中に研究者としての自分が横たわり息をしていないことに気づく。

次は漢訳『一東縁』と幽芳『乳姉妹』の関係について述べる。 罫

記:後に入手した参考文献(定説をくり返している)を追加することができなかった。

【参考文献】

ほぼ発表年順(同一著者のばあいはまとめた。引用していない文献もある)

[木村33]木村毅、齋藤昌三「西洋文学翻訳年表」『岩波講座 世界文学』岩波書店1933.7.5。『乳姉妹』なし

[木村58]木村毅「明治の女性をうならす」『東京(文

- 明開化) 遺跡漫歩』光文社1958.5.25
- [木村61]木村毅「バーサ・クレイと明治文学—私の思い出を通して」『島田謹二教授還暦記念論文集・比較文学比較文化』弘文堂1961.7.15
- [木村80]木村毅「第二編 第二章 日清談判破裂して(上)」『丸善百年史』上巻 1980 ウェブサイト丸善出版
- [瀬沼69]瀬沼茂樹「家庭小説の展開」「解題」『明治文学全集93 明治家庭小説集』筑摩書房1969.6.25
- [女子61]昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第61巻』昭和女子大学近代文化研究所1988.10.5
- [高橋97]高橋修「秘密の中心としての<血統>—『己が罪』『乳姉妹』 菊池幽芳」『國文學—解釈と教材の研究』第42巻第12号 1997.10
- [秋山98]秋山勇造『埋もれた翻訳—近代文学の開拓者たち』新読書社1998.10.20
- [堀00]堀啓子「『谷間の姫百合』試論—Bertha M. Clay を藍本として」『北里大学一般教育紀要』第5号 2000.3.31
- [堀02]バーサ・M・クレイ著、堀啓子訳『女より弱き者』雲南堂フェニックス2002.12.10
- [堀06]堀啓子「日本近代文学における19世紀アメリカの廉価版小説の影響」科学研究費補助金成果報告書 2006年度 実績報告書 ウェブサイトKAKEN
- [堀07A]堀啓子「翻案としての戦略—菊池幽芳の『乳姉妹』をめぐる」『東海大学紀要・文学部』第86輯(2006) 2007.03.30
- [堀07B]堀啓子「明治期の翻訳・翻案における米国廉価版小説の影響」『出版研究』38、2007 電字版
- [堀11]堀啓子「Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その1)」『東海大学紀要・文学部』95、2011
- [堀12]堀啓子『和装のヴィクトリア文学—尾崎紅葉の『不言不語』とその原作』東海大学出版会 2012.7.5
- [堀13]堀啓子「廉価版小説の翻訳への意識」『日本近代文学』第89巻 2013 電字版
- [堀17]堀啓子「アメリカの廉価小説が生んだ明治のベストセラー—尾崎紅葉とバーサ・M・クレイ」『書物学』第11巻特集・語りかける洋古書 2017.8.25
- [西谷01]西谷郁「中国映画の最初の転換点—『姉妹花』論争について」『九州中国学会報』第39巻 2001.5.19
- [松井03]松井洋子「日本の家庭小説におけるバーサ・クレイ作品の受容について」日本大学『国際関係学部研究年報』第24集 2003.2.20
- [松井04]松井洋子「アメリカの家庭小説と日本の家庭小説の対比研究—メアリ・J・ホームズの『嵐と陽光』と菊池幽芳の『乳姉妹』を中心に」日本大学『国際関係学部研究年報』第25集 2004.2.20
- [小凌05]姜小凌「明治と晚清小説転訳中的文化反思—從《新聞売子》(菊池幽芳)到《電術奇談》(吳趸人)」『文化研究』第5輯 2005.5
- [関08]関肇「反転するメロドラマ—菊池幽芳『乳姉妹』を読む」『日本文学』57(7) 2008 電字版
- [関10]関肇「商品としての『乳姉妹』」京都大学文学部国語学国文学研究室編『国語国文』79(1)(通号905) 2010.1
- [KEN08]KEN K. ITO. *AN AGE OF MELODRAMA: FAMILY, GENDER, AND SOCIAL HEIRARCHY IN THE TURN-OF-THE-CENTURY JAPANESE NOVEL*. CALIFORNIA: STANFORD UNIVERSITY PRESS, 2008
- [飯塚05]飯塚容「文明戯の映画化について」『現代中国文化の軌跡』中央大学出版部2005.3.31 中央大学人文科学研究所研究叢書36
- [飯塚08]飯塚容「もうひとつの『姉妹花』—『ドラ・ソーン(谷間の姫百合)』の変容」『中央大学文学部紀要』通号219号2008.2
- [飯塚09]飯塚容「もうひとつの『姉妹花』—『ドラ・ソーン(谷間の姫百合)』の変容」飯塚容・瀬戸宏・平林宣和・松浦恆雄編著『文明戯研究の現在—春柳社百年記念国際シンポジウム論文集』東方書店2009.2.27
- [飯塚14]飯塚容「第六章 『谷間の姫百合』『乳姉妹』の変容—もう一つの『姉妹花』」『中国の「新劇」と日本—「文明戯」の研究』中央大学出版部2014.8.1。注：2009年論文に潘少瑜論文などを加筆したもの。
- [小森09]小森健太郎『英文学の地下水脈 古典ミステリ研究—黒岩浪香からクイーンまで』東京創元社

2009.2.27

[鬼頭11]鬼頭七美「書き換えられた「女の道」——『谷間の姫百合』から『己が罪』へ』『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第17号 2011.3.15

[鬼頭13]鬼頭七美「『家庭小説』ジャンルの生成——菊池幽芳「乳姉妹」とその周辺」日本女子大学国語国文学会『国文目白』52、2013.2.28

[宏淑12]陳宏淑「明治与晚清翻訳小説的訳者意識：以菊池幽芳与包天笑為例」『中国文哲研究通訊』第22卷第1期 中国翻訳史專輯(上) 2012.3 電字版

[少瑜12]潘少瑜「維多利亞《紅樓夢》：晚清翻訳小説《紅淚影》的文学系譜与文化訳写」『台大中文学報』第39期 2012.12

[Law12]Graham Law, Gregory Drozd, Debby McNally, Charlotte M. Brame (1836-1884). Victorian Fiction Research Guide 36[Version 1.1 (May 2012)]

[横井13]横井司「解題」『菊池幽芳探偵小説選』2013.5.20 論創ミステリ叢書63

[編年③]陳大康『中国近代小説編年史』第3巻 北京・人民出版社2014.1

[瀬戸16]瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房 2016.2.29

[瀬戸陳17](日)瀬戸宏著、陳凌虹訳『莎士比亞在中国：中国人的莎士比亞接受史』広州・広東人民出版社2017.1

[楊鄒18]楊文瑜、鄒波「中国における『ドラ・ゾーン』の受容——演劇・メディアを中心に」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第21輯、福岡：東アジア日本語教育・日本文化研究学会 2018.3.31

[鄒18]鄒波「東アジアにおける『ドラ・ゾーン』の翻訳と翻案——小説の翻訳を中心に」香港日本語研究会『日本学刊』第21号 2018.8 電字版

[張治20]張治「評<<説部叢書>叙録」：電子書截成就的文献学創新」『上海書評』『澎湃新聞』2020.1.16 電字版

[樽本137]「付建舟『商務印書館<説部叢書>叙録』について」『清末小説から』第137号 2020.4.1

次号の公開は2020年10月1日を予定しています

陳景韓の漢訳プーシキン(上)

荒井由美

陳景韓の日本留学

陳景韓(1879一作1878-1965)は江蘇省松江(今の上海)の人、日本へ留学したことがある。そう説明されるのが普通だ。陳景韓の漢訳が多くは日本語経由であることも納得できる。

陳景韓が日本を訪問したことは事実だ。しかし詳細は不明である。たとえば日本での留学先が問題になる。早稲田大学だという人がいる。一方でそれは確認できないという調査結果が出た*1。あるいは「畢業於日本熊本中学」(陳冷の項。995頁)*2ともある。根拠は不明。

というわけで次の古い資料を新しく提示する。陳景韓と親しい雷奮のふたりが掲載される留學生名簿だ*3。

「同学姓名報告」

(姓名) 陳 琦景韓 / (年齢) 空白 / (籍貫) 江蘇婁県 / (着京年月) 同上(二十八年五月) / (費別) 同上(自費) / (学校及科目) 予備入校(42頁)

「卒業留學生附録」

(姓氏) 雷 奮繼興 / (年齢) 二十七 / (籍貫) 江蘇華亭 / (抵東年月) 同上(二十四年二月) / (卒業年月) 同上(二十八年四月) / (学校) 同上(東京専門学校) (50頁)

任 陳 張	德 丕 弁	十八	江蘇無錫	全	上	全	上	全
傳 懋	琦 景 韓	二十	江蘇華亭	全	上	全	上	全
硯 墨 緣	雷 奮	二十七	江蘇華亭	全	上	全	上	全
		二十七	江蘇華亭	全	上	全	上	全
		二十七	江蘇華亭	全	上	全	上	全
		二十七	江蘇華亭	全	上	全	上	全
		二十七	江蘇華亭	全	上	全	上	全
		二十七	江蘇華亭	全	上	全	上	全

プーシキン作でピョートル大帝を題材にした作品といえばロシア語原作“Арап Петра Великого”だろう。

ものの本によると原作題名は「ピョートル大帝の黒人」。すなわちアブラム・ペトロヴィチ・ガンニバルなどと呼ばれるアフリカ出身の人物がその人だ。ロシア皇帝ピョートル1世の命により教育を受ける。軍事技術の能力を評価されて最後はタリン総督となった。プーシキンの母方の曾祖父がすなわち「ピョートル大帝の黒人」でもある。未完の原作は1837年に刊行された。

いくつかの英訳がある。“THE MOOR OF PETER THE GREAT”、“THE BLACKAMOOR OF PETER THE GREAT”、“THE NEGRO OF PETER THE GREAT”、“PETER THE GREAT'S NEGRO”などだ*5。

陳景韓の漢訳を見れば2段組みの4頁にすぎない。短篇としても短い。原作の英訳で50頁前後だから特にそう感じる。

英訳を見て漢訳と比較対照した。その結果わかったのは漢訳が原文の第4章および第5章冒頭の一部であることだ。

上記漢訳は陳景韓の単独翻訳になっている。特にそういうのは母我と共訳の作品が別にあるからである(後述)。陳景韓と英語のつながりは薄い。だから陳景韓がわざわざ英訳を底本に使用する必然性がない。やはり日本語訳にもとづいているのではないか。本稿ではそれを確かめる。

その前に先行研究を紹介しておく。

先行研究——李艶麗と国蕊

李艶麗の研究から見る。はじめは原作を指摘し後にそれを取り消した。

陳景韓漢訳の原作について最初の説明は次のとおり。

[艶麗11]即「彼得大帝の黒奴」。日訳本

『彼得大帝の黒奴』*6

「日訳本」で同じ漢訳を示しているのは誤植だとわかる。印刷段階で日本語を組むことができなかったらしい。日本語では「ピョートル大帝の黒奴」だという意味だ。

日訳本といいながら底本についての具体的な説明はない。ここでいう具体的とは訳者、出版社、刊年を指す。ところがその後考えに変化が生じた。

[艶麗14-46頁]④本文在首次發表的時候記：1909-10-14 (俄) 普希金《俄帝彼得》(即《彼得大帝の黒奴》)、陳景韓訳、《小説時報》1期。日訳本《ピョートル大帝の黒奴》。此為誤查、特此更正。

この注④は上に引用した[艶麗11]についてのものだ。調査間違いだということらしい。「ピョートル大帝の黒奴」ではなかったということらしい。どこがどのように誤ったのかの説明がない。かといって新しく別の原作を提示するわけでもない。ただ取り消しただけ。本文において烏羅垓弥爾素羅金(ソローキン)著、日野巖夫、千葉文爾訳『彼得大帝偉績』(出版者：草刈啓徳、明11(1878).10)を出している。だがこれが陳景韓の漢訳になったというわけでもなさそうだ。もともと内容は関係しない。原作探索の調査は中断したのか。よくわからない解説だ。

つぎに国蕊論文の2本から引用する。

先に言っておく。その論文2本は2014、2019年の公表にもかかわらず大昔の樽目録第3版(2002)を使用し続けている。すでに更新して第12版(2020公開)だ。それに比較すればあまりにも古い。国蕊がそうするにはある意味を持たせている。樽目録第3版で間違った事項が存在する。それは後の別版ですでに訂正しているのだ。ところが訂正以前の第3版をわざわざ持ち出して正しくないと国蕊は重ねて指摘

する。為にするところがあっての行為であるといわざるをえない。最新版を使用するのが研究者としての常識ではなかろうか。なにかスッキリしない書きかただ。

冷血(陳景韓)「俄帝彼得」の「底本」だといって以下のように記述している。前後するふたつの記述を並べる。

[国蕊14-239]日訳底本：「ドゥブロフスキー、ペートル大帝の黒奴」*7

[国蕊19]日訳底本：『ペートル大帝の黒奴』、原作：PUSHKIN ALEKSANDR SERGEEVICH, PETER THE GREAT'S NEGRO*8

2014年の日本語論文[国蕊14]では漢訳の「底本」が「ドゥブロフスキー、ペートル大帝の黒奴」だと確かに記載している。この底本説明は不十分だ。

国蕊は基本的に「底本」と「原作」に分ける。そこはよい。だが短篇の「俄帝彼得」に「ドゥブロフスキー、ペートル大帝の黒奴」とふたつの日本語訳を示すのはなぜか。意味が不明だ。なによりも日訳者、出版社、刊年がないことを不審に思う。記述不十分であるにもかかわらず底本だといわれても読者は困惑する。

2019年の漢語論文[国蕊19]は[国蕊14]を引き継いで欠落部分を保持した底本説明をくり返す。新しいのは日本語の「ペートル大帝の黒奴」だけにした。さらに「原作」だと英語題名を追加している。こちらにも英訳者、出版社、刊年がない。いくつもの英訳版があるからその1例だけをわざわざ表示した意味がわからない。説明しないのだ。だいいち原作であればロシア語を示さなければならぬ。せめて「原作英訳」とすべきだった。

国蕊が日本語底本の書誌を明記しないのには理由がある。すこし調べればすぐにわかる。

国蕊に基づいたのは国立国会図書館デジタル

コレクション所収の山村魏『プーシュキン小説集』(叢文閣1921.4.7)で間違いなかろう(注：国蕊はネットを利用して見ている。ならば樽目録も最新版をネットから入手できるはずだ)。

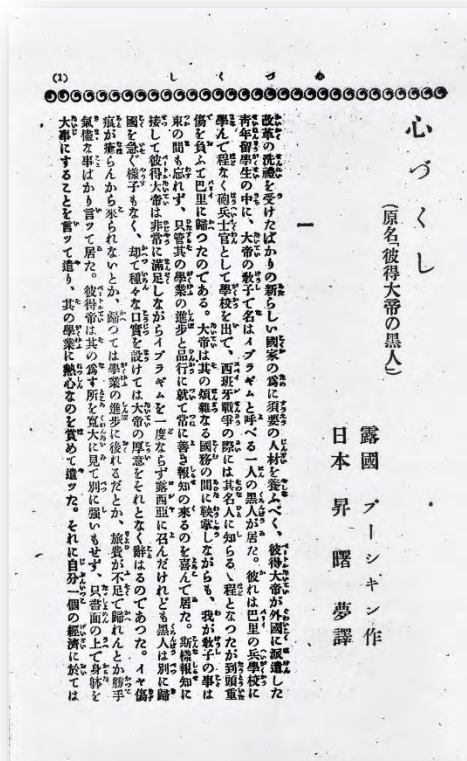
[国蕊14]ではその目次から「ドゥブロフスキー、ペートル大帝の黒奴」部分を誤引用した。[国蕊19]では「ドゥブロフスキー」を削除しただけ。最初から「ペートル大帝の黒奴」を底本とするという主張を堅持しているといえる。

確認してほしい。陳景韓漢訳は1909年公表である。その「底本」に1921年刊行の山村日訳を提示すること自体が間違っている。そこを国蕊は理解している。ゆえに訳者名、出版社、刊年を意図的に隠したとわかる。底本にならないものを「底本」だと示してどうするのか。

日本語を理解する李艶麗と国蕊のふたりともに陳景韓「俄帝彼得」の底本を指摘できていないことに落胆する。ほとんど正解を把握しているように見えるだけにその残念度が増す。

陳景韓「俄帝彼得」の底本

陳景韓が漢訳した際に底本として使用した可能性のある日本語訳が1件ある。



プーシキン作、昇曙夢訳「心づくし(原名「彼得大帝の黒人」)」「『新小説』明治40年(1907)2月1日

次の短篇集に収録された。昇曙夢『(露国名著) 白夜集』章光閣1908.11.25(国立国会図書館デジタルコレクション)。こちらにはツルゲーネフ、プーシキン、コロレンコ、チェーホフ、ゴーリキイなどを収める。プーシキン作品は次の3作、すなわち「雪吹」「黒人」「海少女」だ。雑誌初出の「心づくし」が「黒人」に改題された。そこには「ペートル大帝」として登場する。

作品では彼得(ペートル)大帝が名付け親となったイブラギムという黒人が主人公だ。彼のフランス社交界での艶聞などを描く。

陳景韓の漢訳は前述のとおりその中から第4章と第5章の冒頭を切り取った。ある貴族が宴会をしている屋敷にペートル大帝が突然訪問してくるというだけのこと。小説の主人公である黒人イブラギムは登場すらしない。だから漢訳題名を「俄帝彼得」にしたのかと推測する。それでも題名につられて読めば内容との落差が大きいと感じるだろう。

陳景韓が昇曙夢の日本語訳を底本にしたとわかる2ヵ所を次に示す。

[陳景韓]舞師、年約五十余。其右足為那兒活之戰槍彈所貫。伸縮稍不自由。遇梅痕脱苦樂(均舞名)等劇不能如意。

この舞踏師は年齢五十ばかりでその右足はナルワ戦のとき射貫かれたためにメヌエットとクーラント(ともに舞踏の名)などは不自由であった。

[陳景韓]有名客利者。曾為略城總督。當時蓄三千農奴。娶一少女為妻。多行不義之事。キリイルという客はかつてリヤザンの總督で當時は三千人の農奴蓄え少女を妻にし不義のことを多く行なった。

注目点は舞踏師の年齢と舞踏の名称だ。陳景韓はわざわざ注釈の形にしている。もうひとつは農奴の数を三千人とする個所である。

[昇曙夢]此の舞踏師と云へば年齢五十恰個、其の右足はナルワ役の際、射貫かれた為め、メヌエットと、クーラント(共に舞踏の名)は甚だ不自由であつたけれども 155頁

[昇曙夢]キリイル・ペトローウキチとて、故、リヤザンの總督で、其の当時は三千人の農奴と年若い妻とを、央ばは不義の手段で貯へて居たといふ其人が 159頁

舞踏師の年齢が五十ばかりと共通する。楽曲の具体名に昇曙夢は「共に舞踏の名」と注釈をつけた。陳景韓はそのまま「均舞名」と漢訳している。山村による別訳、あるいは複数の英訳などを見てもここには注釈がついていない。昇曙夢に農奴三千人とある。それを陳景韓もそのままにする。

ところが後の山村は舞踏師の年齢をなぜかしら「四十位」と違う訳にした。もうひとつ農奴の数も「三百人」に書き改めているのだ。もともと刊年の差によって山村日訳は陳景韓の底本になる可能性はない。だが本文の「五十」と「四十」および「三千」と「三百」の違いは明らかだろう。訳者によって数字が異なるのは底本特定のばあいは手がかりになる。

あくまでも念のためだ。山村訳を引用しておく。

[山村魏]この功勞のある舞踏長は年の頃四十位の男で、右足をナルヴァの戦で撃ち貫かれたので、従つてミニユエットやクーラントには甚だ不向きだつたが 165-166頁

[山村魏](キリラ・ペトローウッチ・テイ)前知事をしてみたリアザン県で多少卑劣な手段を用ひて三百人の農奴と若い妻とを得た男であつた 169頁

また、参考までに3種の英訳箇所を注に示しておく*9。舞踏師の年齢と農奴の数は一致している。ただし舞踏曲についての説明はない。

昇曙夢は「ペートル大帝」と翻訳した。ゆえに陳景韓漢訳の「俄帝彼得」も日本語にすれば「ロシア皇帝ペートル」だ。すなわち「ペートル大帝の黒人」である。 罫

【注】

- 1) 李志梅『報人作家陳景韓及其小説研究』華東師範大学2005.4 2005届研究生博士学位論文。33頁「為了不再引起麻煩、乘奮考取上海南洋公学官費留學生之際（1899年底）、陳景韓也與之一同潛往日本早稻田大学留學：雷奮攻読的是政法、而陳景韓則選取了文學攻読、開始了他的留學生活」。略号[志梅博]

それに対して次の著作がある。李艷麗『晚清日語小説訳介研究（1898-1911）』上海社会科学院出版社2014.8。48頁注「②據2005年華東師範大学李志梅博士論文《報人作家陳景韓及其小説研究》指出、冷血在此期間留學早稻田大学文学科。筆者試図追查而無所得、僅在《早稻田大学百年史》中發現“陳景南”的名字、并不能確定。見早稻田大学大学史編集所編《早稻田大学百年史》、早稻田大学出版部、1978-1997年」。略号[艷麗14]

- 2) 徐友春主編『民国人物大辞典』石家莊・河北人民出版社1991.5
 3) 房兆楹輯『清末民初洋学学生題名録初輯』台湾・中央研究院近代研究所1962.4
 4) 『WHO'S WHO IN CHINA (中国名人録)』第5卷 龍溪書舎1974.10.30。31頁
 5) 英訳は open library、project gutenbergr など に収録。参照したのは以下のとおり。

ALEXANDER SERGUEVITCH POUCHKIN (ALEXANDER SERGUEIEVITCH PUSHKIN): THE MOOR OF PETER THE GREAT. (MRS. J. BUCHAN TELFER 英訳) "RUSSIAN ROMANCE" LONDON: HENRY S. KING & CO., 1875所収/該作品は全47頁/open library
 PETER THE GREAT'S NEGRO. (MRS. SUTHERLAND EDWARDS 英訳) "THE

QUEEN OF SPADES AND OTHER STORIES" LONDON: CHAPMAN & HALL, 1892所収/該作品は全54頁/project gutenbergr

PETER THE GREAT'S NEGRO. (T. KEANE 英訳) "THE PROSE TALES OF ALEXANDER POUCHKIN" LONDON: G. BELL AND SONS, 1894初版、1896、1911、1916所収/該作品は全46頁/open library

- 6) 李艷麗「晚清俄国小説訳介路徑及底本考——兼析“虚無党小説”」『外国文学評論』2011年1期 2011.2 電字版。略号[艷麗11]
 7) 国蕊「陳冷血による翻譯小説の底本に関する考察」『跨境:日本語文学研究』第1号 2014.6 高麗大学校日本研究センター 電字版。略号[国蕊14]
 8) 国蕊「近代翻譯文学中日本転訳作品底本考論——以陳景韓的転訳活動為例」『文学評論』2019年第1期 2019.1。電字版。略号[国蕊19]
 9) 3種英訳の例。

TELFER p.270 "This worthy dancing-master was fifty years old, his right leg had been shot through at Naron, and was therefore, not very agile at minuets and courants"

p.273 "an ex-voievodes of Riazan, where he had secured to himself 3000 souls and a young wife, neither the one nore the other quite honestly"

EDWARDS p.242 "This worthy dancing master was about fifty; his right foot had been shot through at the battle of Narva, and therefore it was not very active at minuets and courantes"

p.245 " (Kirila Petrovitch) formerly a voievod at Riasan, where he qcuired 3,000 serfs and a young wife, neither by strictly nonourable means"

KEANE p.444 "This deseving dancing-master was about fifty year of age; his right foot had been shot through at Narva, and consequently he was not very well suited for minuets and courantes"

p.447 "a former governor of Riazan, where he acquired three thousand serfs and a young wife, both by somewhat dishonourable means"

清末《旅客》杂志小说目录

王 玉 梁 艳

《旅客》(The Passenger) 周刊是一种颇有趣的清末杂志(见图1)。1908年9月12日(光绪三十四年八月十七日),它由沪宁铁路局附设的进行社创办,供沪宁线的旅客阅读*1。就像今天我们在飞机或高铁上读到的杂志一样,它的主要功能是供乘客消磨时间。当年能坐得起火车的乘客,经济条件应该还算不错。体现在这本杂志的内容上,就是商业广告特别多,每一页的上半页均为广告。而且不少广告内容看起来属于高端消费,比如银行、药房、洋行、衣号、旅馆等。另外,它还刊登沪宁铁路开车时刻表,对乘客来说具有实用价值。

图1:《旅客》创刊号封面



图2:《旅客》第1卷第6期目录

笔者近日在全国报刊索引数据库(上海图书馆)中阅读了它的电子版。《旅客》目前保存不全,第1卷(1908年9月12日至1909年1月2日)共17期*2,缺第7期、9期、10期、14期、15期;另外第1期仅存部分内容,无小说目录。第2卷(1909年1月23日至1909年11月27日)共45期,缺第19期。栏目有社说、小说、杂谈、剧评、剧谈、通信等;主要作者有冷、龙、雪等。该刊总发行所为上海爱尔近路(现安庆路)第95号进行社,售价20-50文不等。封面正中有一幅插画,除了一些人物外,多为飞机、潜水艇、雪橇、帆船等交通工具。据说复旦大学图书馆也藏有该刊*3。

值得一提的是,《旅客》这本伴随沪宁铁路通车诞生的、具有浓郁现代气息的刊物,对通俗小说情有独钟。首先,该刊广告中就有商务印书馆等出版机构的小说目录。比如,所刊登的中国图书公司出版书目中,就有军事小说《英德战争未来记》、侦探小说《美人唇》、侦探小说《奇瓶案》、侦探小说《英伦之女贼》、言情小说《绿阴絮语》、裁判小说《棠花怨》。其次,小说是该刊常设栏目(见图2)。据笔者统计,现存杂志中共有44篇小说,作者中不乏“冷”(陈景韩)、“笑”(包天笑)等知名报人、作家。这应该和刊物的

编辑策略有关，毕竟侦探等通俗小说能更多地吸引读者。

不过很奇怪，一些著作虽然提到了《旅客》这本杂志，但该杂志上的小说却被各种目录失收。关于该刊，全国报刊索引数据库的介绍是：“文学刊物。本刊连续登载‘论旅客’文章，空洞无物；在小说栏目里登载一些侦探小说和滑稽小说，没有什么思想性；还载有外国见闻和一些广告。”笔者认为，“空洞无物”、“没有思想性”的评价不甚准确。这些小说既是清末小说的有机组成部分，又对深化研究陈景韩等作家具有极大价值。从作品篇目来看，陈景韩是该刊的重要撰稿人。该刊共登载了8篇署名“冷”的翻译小说和创作小说。同时，每期卷首连载的《说旅客》（共63回，除第43、44回署名“笑”以外，其他均署名“冷”），可以说是陈景韩为其量身打造的看板。文章内容多是他以“旅行”、“旅客”为主题阐发的议论，笔锋直指中国人的各种劣根性，言辞犀利尖锐，主张以“旅客”、“旅行”为良药来医治此类顽疾。这

些文章对于了解陈景韩的救国理念、文学创作思想等具有重要的参考意义。此外，《说旅客》也记录了一些他在火车上或者在旅行途中的见闻杂感，这些对于梳理陈景韩的生平经历具有史料价值。比如，第55回《说旅客》（《旅客》第2卷第37期）中，陈景韩回忆了他同一位少年友人从东京乘坐夜行列车前往熊本途中所遭遇的难事。至今为止，学界对陈景韩的留日经历尚知之甚少，上述文章则可弥补一些缺憾。当然，该刊所载其他作品，也可能对包天笑、蟠溪子、甘作霖、南风亭长等作家的研究有所补益。

《旅客》是伴随着清末铁路和交通工具的“现代化”而诞生的刊物。它是中国铁路发展历程的见证，同时也是探究铁路文学和铁路文化演变的一个窗口。当前，中国正处于新冠肺炎疫情防控阶段，高校推迟开学。笔者遂利用这段不能出门的空隙，将该刊小说栏目所有篇目逐一整理出来，以供学界参考。 □

《旅客》杂志刊载小说一览表

(按标题首字母排序)

	类型	标题	作者	刊期	备注
1		碧海沉没卷上(蟠溪子译丛之一)	英人蔼斯歌著	第2卷第41-45期 (1909年10月30日-11月27日)	蟠溪子，即杨紫麟，苏州人，住在盘门，盘通蟠，故署蟠溪子。曾任职《时报》馆。他和包天笑订有金兰契，译有《迦因小传》等小说 ⁴⁾ 。
2		病夫国游记	老铁藁	第1卷第17期 (1909年1月2日)	
3		跛聋哑合群记	亮丞	第1卷第16期 (1908年12月26日)	
4		茶花雪		第2卷第22-28期 (1909年6月19日-7月31日)	
5		查口票	晚成	第2卷第40期 (1909年10月23日)	
6		唇动法		第2卷第29-39期 (1909年8月7日-10月16日)	
7	侦探小说	俄德两君之密会	冷	第2卷第1期 (1909年1月23日)	冷，陈景韩笔名。
8	教育小说	恶犬	冷	第1卷第5-6期 (1908年10月10日-10月17日)	
9	短篇小说	枫溪某翁		第2卷第28期 (1909年7月31日)	

10	短篇小说	刮地官	王公羽	第1卷第17期 (1909年1月2日)	
11	冒险小说	怪岛之一夜	裔	第2卷第3期 (1909年2月6日)	转自《云南》(东京)1908年第13期,短篇冒险小说《怪岛之一夜》,炎裔译。翻译小说。
12	时事之一	官公司	南风亭长	第2卷第41期 (1909年10月30日)	南风亭长,上海环球社部员 ⁴⁵ ,著有《中国侦探:罗师福》(1909-1910年载《图画日报》)、《遗传毒》(载1910年1月11日《十日小说》) ⁴⁶ 。
13	自治小说	极乐市(三)	冷	第1卷第11期 (1908年11月21日)	
14		金钢钻案	玉	第1卷第2-6期 (1908年9月19日-10月17日)	
15	时事小说	客丐谈	聊	第2卷第1期 (1909年1月23日)	转自《夏声》(东京)1908年第1期,小说二《客丐谈》,作者:聊公。
16	实事短篇	苦孀	竞强	第2卷第32期 (1909年8月28日)	
17		冷眼帝国		第2卷第26期、第28期、第29期 (1909年7月17日、7月31日、8月7日)	
18		两个旅行客	笑	第1卷第2期 (1908年9月19日)	笑,包天笑笔名。
19	满洲探险	马贼	冷	第1卷第4期 (1908年10月3日)	
20		某军门	明语来稿	第1卷第17期 (1909年1月2日)	
21	家政小说	母教	家政会来稿	第1卷第16期 (1908年12月26日)	
22		女海贼	江见水荫著;罗汉译	第2卷第15-18期、第20-21期 (1909年5月1日-5月22日,6月5日-6月12日)	江见水荫为日本作家,《女海贼》曾出单行本,商务印书馆编译所译,光绪三十四年(1908年)七月初版。
23	短篇小说	日本留学指南		第1卷第11期 (1908年11月21日)	
24	侦探小说	日俄媾和秘密谭	醉	第2卷第1期 (1909年1月23日)	
25		三月十六日	病稿	第2卷第22期 (1909年6月19日)	
26	时事短篇	商品陈列所中之一口痰	花剑	第2卷第2期 (1909年1月30日)	
27		上海蚊虫说(译二月十一号第七页《字林西报》)	朱鸣冈	第2卷第6-7期 (1909年2月27日-3月6日)	本篇又刊于《通问报:耶稣教家庭新闻》1909年第339期丛录栏目。作者朱鸣冈,1911-1924年曾在《圣心报》、《圣教杂志》发表文章。
28	探险小说	蛇虎斗(踏冰生笔记之一)	冷	第1卷第16期 (1908年12月26日)	
29	侦探小说	失王记	绿波	第2卷第5-14期 (1909年2月20日-4月)	从内容看,这是一篇翻译小说。

				24日)	
30		十某甲(江宁复选之历史)		第2卷第21期 (1909年6月12日)	
31	笔记小说	数缕发	霖	第2卷第9期 (1909年3月20日)	转自《东方杂志》1907年第4卷第6期笔记小说《数缕发》，著者美国加撒林克罗女史，译者平湖甘作霖。
32		双绞剑案	雪	第1卷第6期、第8期、 第11-13期、第16-17 期；第2卷第1-2期 (1908年10月17日， 10月31日，11月21日- 12月5日，12月26日- 1909年1月2日，1909 年1月23日-1月30日)	
33	亡国小说	田猎犹太人	冷	第2卷第1期 (1909年1月23日)	
34		铁拐李	丁云	第2卷第40期 (1909年10月23日)	
35		投票书所见(又名《关门选举》)		第2卷第21期 (1909年6月12日)	
36	短篇小说	托金误婿	我	第2卷第32期 (1909年8月28日)	
37	侠客谈之一	侠贼	冷	第2卷第2-3期 (1909年1月30日-2月 6日)	
38	寓言小说	新耕织图		第1卷第8期 (1908年10月31日)	
39	时事短篇	醒俗俚谈	忍庵	第1卷第17期 (1909年1月2日)	
40		选举奇谈	亢兴北	第2卷第21期 (1909年6月12日)	
41	虚无党小说	炸弹	冷	第2卷第1期 (1909年1月23日)	
42		赵先生	鬼邻子	第2卷41-42期 (1909年10月30日-11 月6日)	
43	时事之一	侦探谈	耕孙	第2卷第41期 (1909年10月30日)	
44	短篇小说	自由神	虱	第2卷第4期 (1909年2月13日)	

本文系国家社科基金青年项目“中国近代翻译文学中的日文转译现象研究(1898-1919)”(15CWW007)、国家社科基金重大项目“近代以来中日文学关系研究与文献整理(1870-2000)”(17ZDA277)的阶段性成果。

(作者单位：上海行政学院校刊编辑部；同济大学外国语学院)

【注】

1) 马光仁：《上海新闻史 1850-1949》，复旦大学出版社，1996年，第378页。

2) 全国报刊索引能见到的第1卷最后一期为第17期。

从创刊号开始至2卷45期社说《说旅客》共连载63回。如果第1卷仅17期，则与《说旅客》回数不符。

由此推測第1卷至少有18期(1月9日)。另外,考慮到《旅客》是周刊,亦有可能出版了第19期(1月16日)。

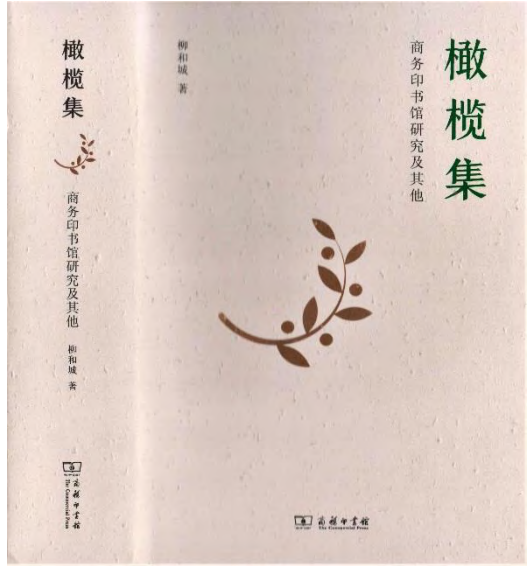
- 3) 刘永文:《晚清小说目录》,上海古籍出版社,2008年,第471页。
- 4) 郑逸梅:《芸编指痕》,北方文艺出版社,2016年,第55-56页。
- 5) 江苏省社会科学院明清小说研究中心,江苏省社会科学院文学研究所:《中国通俗小说总目提要》,中国文联出版公司,1990年,第1148-1149页。
- 6) 上海图书馆:《中国近代期刊篇目汇录》(第2卷下),上海人民出版社,1982年,第2697页。

清末小説から

崔文東氏より資料をいただきました。感謝。

- 陳 建華○“虚無党小説”——清末特殊的訳介現象
『華東師範大学学報(手越学社会科学版)』
1996年年第4期
- 飯塚 容○第四章 黒岩涙香『野の花』の変容——
『空谷蘭』をめぐる『中国の「新劇」
と日本——「文明戯」の研究』中央大学出版
部2014.8.1
- 楊文瑜、鄒波○『野の花』の種本と黒岩涙香の訳述
に関する考察 『東アジア日本語教育・日
本文化研究』第19輯、福岡:東アジア日本
語教育・日本文化研究学会 2016.3
- ○中国における『ドラ・ソーン』の受容——
演劇・メディアを中心に 『東アジア日本
語教育・日本文化研究』第21輯、福岡:東ア
ジア日本語教育・日本文化研究学会 2018.3.31
- 党 莉莉○近二十年清末民初偵探小説訳研究回顧
与反思 『華北理工大学学報(社会科学版)』
第16卷第5期 2016.9
- 付 建舟○商務印書館《説部叢書》在近代中国的伝
播与接受 『浙江師範大学学報(社会科学

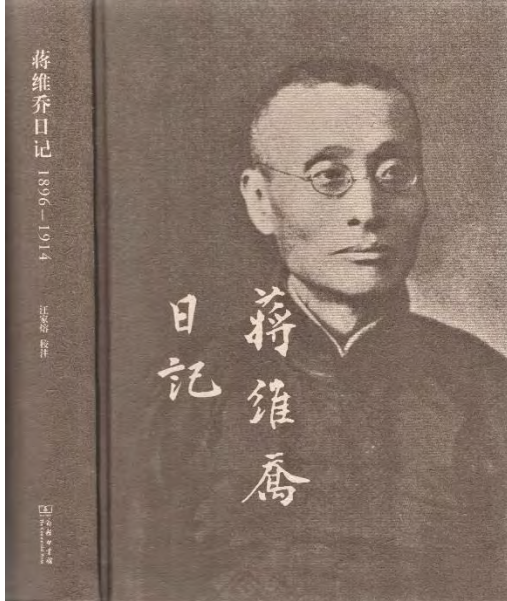
版)』2019年第3期第44卷総第222期 2019
柳 和城○『橄欖集:商務印書館研究及其他』北
京・商務印書館2020.1



- 国 蕊○近代翻訳文学中日本翻訳作品底本考論——
以陳景韓の翻訳活動为例 『文学評論』
2019年第1期 2019.1
- 任 江輝○清末漢訳日文小説の出版伝播 『成都理
工大学学報(社会科学版)』2019年第3期2019.6
- 黄 曼○『晚清海帰与小説』武漢・華中師範大学
出版社2019.8
- 劉 樹森○清末民初的翻訳小説:起源与誤読 『芸
齋窗下』2019.10.26
- 崔 龍○『希望之城与魔性之都:民国時期中日偵
探小説中的“兩個”上海』成都・四川大學出版
社2019.11
- 陳 碩文○「這奇異的旅程!」:周瘦鵑的匪羅羅蕪小
説翻訳与民初上海 『政大中文學報』第32
期 2019.12 電字版
- 胡 全章○《中国女報》秋瑾佚文佚詩考論 『文学
遺產』2020年第2期 2020.3.15
- 崔 文東○林紓的現代性方案:評韓嵩文《林紓的文
字製造廠:翻訳与中国現代文化的生成》
『文学』2018年秋冬期(復旦出版社2019.9)
- 安 博○翻訳与“腦力勞動”:評《林紓公司:翻訳与
現代中国文化的形成》 『文学』2018年秋
冬期(復旦出版社2019.9)

江 曙○新式学生与清末民初短篇小説文体的演進——以革新前《小説月報》為中心 『明清小説研究』2020年第1期(總第135期)
2020.1.15

蔣維喬著、汪家熔校注○『蔣維喬日記：1896-1914』
北京・商務印書館2019.11



羅 紫鵬○清末民初小説撰稿者的署名問題 『明清小説研究』2020年第1期(總第135期)
2020.1.15

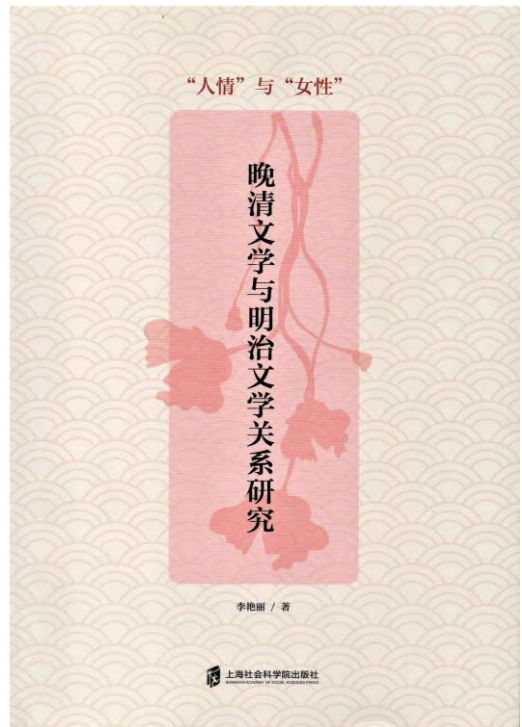
李 樂樂○《域外小説集》：作為方法的“東西顧問”
『中国現代文学研究叢刊』2019年第12期(總第245期) 2019.12.15

李 春○“十九世紀文明”的訳介与魯迅早期的文学道路
『中国現代文学研究叢刊』2019年第12期(總第245期) 2019.12.15

『出版史料』2019年新総第59期

2019.12

広告里的出版史料——早期商務印書館図画類印品鈎沈
……柳和城
略論《農学报》的創辦及其發展演变 ……劉玲娣
出版史料建設的方法論啓示——讀《民国図書出版史編
年：1912-1949》 ……曾建輝



『晚清文学与明治文学關係研究——“人情”与“女性”』

李艳丽 上海社会科学院出版社2019.12

第1章 跋行的西方文明介紹者——假名垣魯文与林紆之比較文学研究

第5章 蘭姆版《莎士比亞物語》在明治前期的訳介与伝播

第6章 “徳”“情”之間的浮沈——作為写情小説家的林紆の肖像

第7章 “徳”“情”之間的浮沈——作為写情小説家的吳趸人の肖像

第8章 両性と“国家”——晚清写情小説、“新女性”小説与知識界

第10章 日本晚清小説研究中的“実証”与“発現”——《清末民初小説目録》与《林紆冤罪事件簿》

第11章 林訳《不如帰》与外交偵探小説——徳富蘆花亦“無聞”

第12章 一個女子的“毒化”与“美化”歷程——假名垣魯文《高橋阿伝夜叉譚》与王韜《紀日本女子阿伝事》